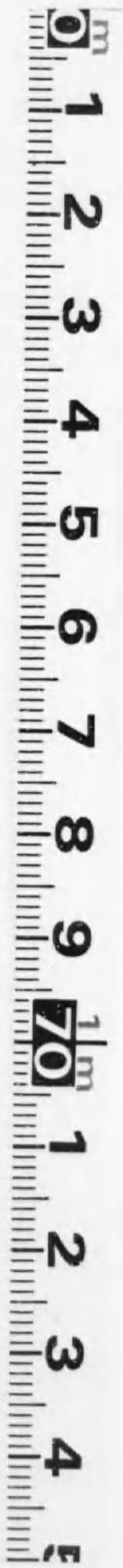
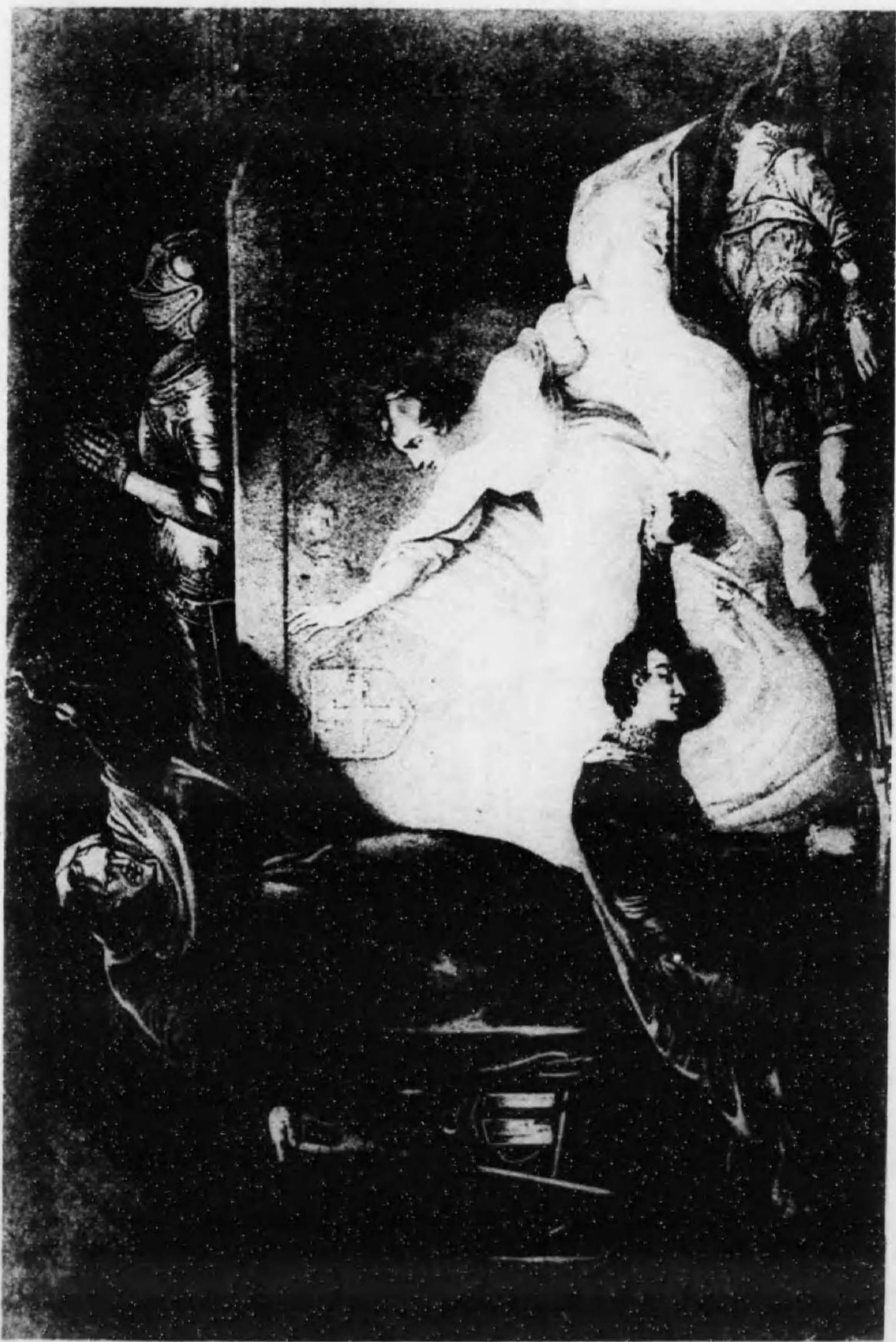


522
2
176



始







ロミオ
ジュリエット

坪内逍遙譯

13. 3. 29

購求

Friar.

Romeo!—

*Alack, alack, what blood is this, which stains
The sony entrance of this sepulchre?*

*What mean these masterless and go-y swords
To lie discolour'd by this place of peace?*

Romeo! O, pale!—Who else? What, Paris too?

And steep'd in blood?—Ah, what an unkin'd hour

Is guilty of this lamentable chance!—

The lady stirs.

Ful. O, comfortable friar! where is my lord?

I do remember well where I should be.

And there I am: Where is my Romeo?

Printed by James Northcote, R. A. Engraved by Peter Simon.

縮言

出版年代

「ロミオとジュリエット」の原版は一五九七年に刊行せられたるを最初のとす、所謂第一クォーター版なり。之を第二以下のクォーター版に比するに、精粗の差著し。外題は、第一クォーターの表扉に記したる所によれば下の如し。

ロミオとジュリエットの巧妙なる趣向の悲劇。

上院議官 ハンスドン 卿の家來衆によりて屢々大喝

采を以て公に興行せられたるまゝ。

ハンスドン卿は一五九六年七月に侍従長在職中に逝去し、一五九七年四月までは其後任定まらず、其間侍従長附なりし俳優一座は、卿の逝去せるに係らず、依然「ハンスドン家來」と名宣りをれり、随つて此悲劇の演せられしは一五九六年か一五九七年か明かならず。たゞし作者が此劇に筆を着けしは、多分それよりも以前なるべく、沙翁學者の或者は、作中の乳母の白に「地震から十一年目」といふ語あるを證として、こは一五八〇年のロンドンの地震を指すと做し、一五九一年（作者三十七歳）頃の作と推

定す。されどまた學者によりては、白中に謂へる地震は一五七〇年に伊太利エローナ近傍に起りし地震を指せるかも知れずと做して前説を破す。そは何れにもせよ、此作は沙翁がまだ年若き頃の着筆らしく、脱稿して興行に用ひし後も幾たびか修正し、一五九二年と一五九九年（第二クォーター出版の年）との間に現用の如く大成したるものらし。學者の査定によれば、一六〇九年に更に第三のクォーター（ほとんど第二クォーター其儘のもの）出で、其後年月未詳に第四クォーター（明かに第三クォーターのまゝのもの）出で、又一六二三年には第三クォーターを土臺と

したりと思はるゝ第一フォリオ版出で、一六三七年には第四クォーターと殆ど同一なる第五のクォーター出でたりと云ふ。此中第二クォーターを以て最良の種本とす。現に行はるゝ此劇の本文は件の第二クォーター版を土臺として第一クォーター及び其他を参考の上、慎重なる校修を経て成れるものなり。

第一クォーターと第二との關係

第一クォーターと第二クォーターとの關係につきては學者間に異論あり。或は之を以て第一「ハムレット」と第二「ハムレ

ト」との關係と同視して、第一は作者が第一稿にして未成熟の想と筆とを示すもの、第二は後年の補修を経て成れるものと臆測す、されど近頃は然見ざるが多し。按ふに第一版は例の剽窃刊行に屬するものたること略明かなり、すなはち當時の不正なる出版者が何等かの手段によつて原作臺帳の不完全なる寫しを手に入れ、尙それのみにて足らざる部分は看劇の際の記憶又は速記によりて補ひ（版權などの無き頃の事として）作者の許可をも校閲をも經ずして出版したるものなるべし、故に甚しき誤謬もあれば脱字、脱文もあり。要するに第一ク

トートの蕪雜なるは第一稿なるが故といふよりも剽窃刊行なるが故と見る方當れるが如し。第二のクォートーとも、作者の校訂を経たるにはあらず、されど第一クォートーの謬脱を正すと同時に、作者が後に下したるらしき添削をも取入れたれば、比較的完璧に近きものと見てよかるべしとなり。例のファルネスの集注本には右二種ながらを収めたれば、比照して二版の相違の第一「ハムレット」對第二「ハムレット」の如くなるかあらざるかを檢すべし。第一クォートーの特質はトガキにありとダウデン氏は曰へり。看劇中に白^{せう}を速記すると共に時々肝要と思はれたる俳

優の仕草をも記しおきたるを、後に其儘に記入して刊行せるならんか。沙翁在世時の舞臺の様窺はれて興あり。本譯に挿入せるトガキ中之に據れるもの二三あり。

材源

ロミオとジュリエットの戀物語は長き歴史を有す。沙翁が此悲劇を作しつゝありしと殆ど同時に、伊多利人ジロラモ・デ・ラ・コルラといふが「エローナ史譚」と題したる書を公にせしが（一五九四—九六）其中に歴史上の事實として此二情人の傳を録せり。ジロラモに従へば、事は一三〇三年に屬

し、時にエローナ市はバルトロメオ・デ・ラ・スカラといふ人によりて治められたり、云々。されども故ロルフ氏は件のジロラモは史家としては信用するに足らずと曰へり。さてまた眠薬を用ひて假死するの筋は早く既に中古時代(第二世紀)の希臘小説家ゼノフォンの著「エフエジャカ」中に見えたりとなり。若き妻が夫の不在中再婚を強ひらるゝを厭ひ、毒を服する積りにて誤つて眠薬を服し昏睡すといふ筋なり。尙此物語の傳統及び之に因める作物に關しては特に綿密なる考證を試みたる學者少からず。ダウデン氏が其著「ツランスクリブツ・アンド・スタデーヌ」中に收めたる

此劇に因める十餘の名作の略説は簡にして要を得たると同時に此劇の批評としても面白きものなり。

ロミオとジュリエットに關する作は沙翁が作以前に世に知られたるもの數種あり、されば一時は、沙翁は其何れを主なる材源となしたるかといふ事に就いて異議ありしが、今日に至りては、作の直接の地盤のアーサー・プルックが叙事詩「ロミウスとジュリエットの哀史」たりしこと最早疑ふべからざるが如し。こは伊多利人バンデロが作の小説を(佛譯を経て)自由に意譯したるものにして一五六二年の發行なり。プルックが此律語譯の出で、後、一五六七年に、同

じ佛譯によりたるペインタアの散文譯出でたり。「バレース・オブ・プレジューア」といふ詩集中に收めたるもの是れなり。尙ブルックが英譯以前に同じ筋を劇に仕組みて（其臺帳は傳はらざれども）演じたることありとも云ふ。されど後二者と沙翁との關係は明かならず。

ロミオとジュリエットの哀史

ブルックが叙事詩と沙翁が作との關係は頗る密接なり。極言すれば、沙翁は筋立も人物の種類も場面の順序も殆ど悉くブルックに見えたるまゝを取入れ、之を劇化し詩

化することによりのみ其力を傾けたりとも見ゆ。ダウデン氏が其校註に係る「ロミオとジュリエット」の卷末に附したるブルックが哀史の分析は、彼れと本劇との聯絡の如何に密なるかを明かにすると共に、此物語の梗概を傳ふるに宜しければ、左に譯出す。

卷頭先づデローナ市の状況を叙す。

キャピレット Capulet 家とモンタギュー Montague 家と相確執す、之を鎮めんために領主公爵エスカラス最初は穩和の手段を、後には峻嚴の手段を用ふ。

ロミウス *Romeus* といふ美少年或美しき姫に懸想す、されど

其女は賢くもあり操堅くもありて靡かず。

ロミウスは叶はぬ戀に悶ゆること數ヶ月の後、旅行して此煩悶を醫せんと欲しながら、とかくして決しかねつ。

日々に衰へしほたれて旭に融けゆく雪の如し。

縁者黨人何事に惱めるかと怪み訝る。

其友人中にて第一の信友たる者ロミウスを苦諫し、むしろ他の美女を求め出だして愛せよ。

容姿の其強顔つれなきをんな女に比して敢て劣らざる可憐の女を。

さる美女を見るを得ば、心はそこに留まりて

前の戀と煩悶とを悉く忘れ果つべし。

ロミウス宴席に臨みて他の美人群に屬目すべしと約束す。

かくて三ヶ月程経つうちにクリスマス祭の祭時となり、キャピレット家にて盛宴の催しあり、紳士佳人招かれて赴く。ロミウスも(土地の風習によりて)假面を被りて他の五士と共に赴く。

假面を脱するに及びてロミウスは室隅に退きたりしが、炬火の光にて認識せらる。キャピレットの族人怒を忍ぶ。

ロミウスは臨席の美人群を觀察するうち、特に抜んで、麗しき一佳人を見出だして以前の戀を忘れ果つ。ジュリエットの星眸はロミウスの心に深く投錨せり。戀神キューピッドは其弓を以て彼れを射たり。彼等の眼は互に相愛を告げたり。

舞踏果て、後ロミウスはジュリエットの側に坐せり。

他の側にはマアキユシオと呼ばはる一紳士坐せりしが、

こは當時到る處に重んぜられし俊才にして、

辭令に巧みに、面白き工夫に秀で、

物羞する少女群に在りては羊群に交はる獅子の如し。

親しげに美しきジュリエットが雪の如き手を握りしが、

此人生れながらにして一種の特質を有せり、

凍れる山の堅氷とても其手の冷さに似るべくもなし。

戀人等の手と手は觸れたり。ロミウスは何もえ言はず。

ジュリエットは「けふ逢ひまつるは天の恵みぞ」と言ひて、あ
とは語なし。やがて互に語らふやうになりて、ロミウス

は其切なる思ひを明す。ジュリエットはロミウスと別るゝに
先だちて（面目を保つことをだに得ば）君の妻たる心な
りと自白す。

ロミウスはじめて女の名を知りて運命の神と戀の神とを
怨む。とはいへ今は無情むねなからぬ人に仕ふるなりと自ら
慰む。

ジュリエットも、最初はわざと（乳母に）他の人の上を問ひつ
ゝも、終に戀人の名を知る。

手に假面を持たる彼の君は誰ぞ、

あの窓の傍に假面舞踏服を被て立てる。

乳母は曰へり、彼の人にはロミウスなり、モンテギウのと。

ジュリエットは心竊に絶望すれども、外面は嬉しげにもてなす。其夜は眠りかねて自問自答すらく、ロミウスは不實の人にてはあらずや。いや／＼、あの如き容姿に二心の潜むべくもなし。予は彼の人を愛せん、彼の人予を正妻とする心だにあらば、二人の結婚は兩家平和の媒たらんと。

旦となる。ロミウス通りすがりに窓に倚れるジュリエットを見る。されど危みて近づかず。かかる事しば／＼あり。ふとジュリエットが倚りかゝる窓の前に廣き園あるを發見

す。そこへ夜が其黒き外套を投げ掛けたる時、ロミウス劍を帶んで竊に赴く。されど一二週間は効なし。ある月夜ジュリエット窓に倚りかゝりて、ロミウスの忍べるを發見す。其歡喜はロミウスにも優る程なり、さるはロミウスの見えすなりしを危み疑ひつゝありし故なり。ジュリエットはロミウスの身を危みて曰ふ

おい、ロミウス(御身の命を)餘りに輕々しく扱ひたまふかな。

こゝにて今頃敢て危きを冒したまふとは。

若し御身の仇敵たる我近親に見附けられなば如何。

ロミウスは自衛の覺悟ありと答へ、命を惜むも只卿の爲

にのみといふ。ジュリエットは涙を流し、おのが腕かひなに其身をもたせながら其戀を語り、正しき結婚を目的としたまふならば、何處いづこまでも従ひ行くべし、されど若し一時の玩あそび弄あそびとなさん心ならば、速に立去りたまへと言ふ。ロミウス歡喜し、明日あす早くフライヤー宗の僧ローレンス法師を訪うて助言を求めんと言ふ。

こゝに至りてフライヤー僧の上を叙す。

跳足のフライヤー僧灰色の衣に繩を纏へり、
彼れはフランス派に屬せる僧なればなり。

.....
彼れは自然界に潜在せる許多の祕密をも知れり。

ロミウスは翌朝までは俟ちかねてローレンス法師の許に赴く。法師最初は延引を勸告せしが、結婚によりて兩家の確執を解くこともやと望みて、終にロミウスの意に任す。ロミウスは一晝夜だけの延引を諾す。

ジュリエットの腹心は平生同じ室に眠る老いたる乳母なり。骨折賃を與ふべしと約して、ジュリエット乳母の幫助を得。乳母ロミウスの許に赴く。ロミウス曰く

土曜日に若しジュリエットが懺悔式に來まされば、
其式を了へてやがて結婚せしめらるべし。

乳母は何とか口實を設くべしと約し、ジュリエットの幼時に

つきて語る。

彼れ曰く、幼かりし時は可憐き嬰兒なりき、

それはく、片言まじりに可憐きことをよう喋舌らしやりき。

ロミウス金を乳母に與ふ。乳母歸りてロミウスを賞めたゝ
ふることに頻りなり。

それよりも婚儀の事を語りぬ、返辭は何とありしぞ。

乳母曰く、まゝ待たしませ、唐突の歡びは怪我をや醸さん。

ジュリエット曰く、予は戯れを欲せず、汝は調戯を好めど。

土曜日にジュリエットは乳母と少婢とを將てジュリエットの母
の吩咐にて教會に赴く。ローレンスは乳母と婢とを「お祈

禱を一段か二段「聽いて來よとて出だしやる。ロミウス
は法師の庵にて俟つこと既に二時間に及べり。「一分々
々が一時間とも思はれ、一時間一時間が一日とも思はれ
たり」。戀人らの結婚式濟む。ロミウスは繩梯子を受取
るため乳母を我許へ送れとジュリエットに言ひ残す。彼等
は日を長しとかこち、若し太陽を意のまゝになし得べ
くば「庭の黒き影と二重にしたる暗とが隈もなく蔽ひ隠
すべきに」などと思ふ。

定めの時となる。ロミウス石垣を跳り越えて繩梯子を攀
づ。新婦新郎相抱いて其過去と現在とを語り合ふ。乳

母同心合體の實を全うせよと勸む。夜明となる。「日神フレイバースの駒の足あがき搔速はやきを痛く憎みて悲み咀ふ」。かゝる嬉しさ一月二月が程續く。復活祭イースターの月曜にジュリエットの従弟に當る年若きキャピレット、名はチップルトと言ふ「武器業うちものわざの達人」首魁となつてモンタギウ家の族人と街上に鬪戦す。ロミウス鬪戦者を引分けんと欲す。「恐怖の故にあらず、他の重大なる故ありて、吾は敢て我逸はなる手を止むるなり」、云々。チップルトはロミウスを罵りて、「臆病者、二心を抱く小冠者」と言ふ。二人戦ふ。チップルト殺さる。キャピレット家は（領主に）ロミウスの死を要求す。モンタギウ家

は抗議す。傍觀者はチップルトを非難す。領主はロミウスを追放すと宣告し、兩家の者に其血に塗れたる劍を抛てと命す。

ジュリエット涕泣して頭髮を搔き宅り、チップルトの死を歎き、不幸の媒となりし窓を咀ひ、ロミウスを罵る、やがて又ロミウスの名を汚したる罪つみ虐殺に當るとして自ら譴む。乳母の來るやジュリエット寢床上に倒れて死せるが如し、やがて蘇りて又號泣す、乳母慰めて、程なくロミウスは追放より呼戻さるべしと言ふ。乳母はローレンスの庵に潜めるロミウスの許へ行かんと言ひ出づ。ジュリエット乳母を遣

す。

ロミウスは未だおのが運命を知らず。ローレンス外出して領主が宣告を聞知して歸庵す。彼れは乳母にロミウスが夜に入りて後事を相談せんためジュリエットの許へ忍ぶべき由を告ぐ。且つロミウスに宣告の可なるを告ぐ、曰く死刑にあらずして追放なりと。ロミウス狂氣のやうになりて髪を掻き耨り、身を地上に抛ち、死を願ひ、造化を咀ひ、生誕の時處を咀ひ、星を咀ひ、運命を咀ふ。法師彼れを叱りて曰く

汝は男なるか。容姿は曰ふ、汝は男なりと。

汝の叫び聲、汝の涕泣せる眼は女子の心を現はす。

.....
 故に予は少くも現時程は疑うて立てり、
 汝は男か女か、但しはけだものかと。

敢て忍耐せよとロミウスを勵ます。汝の仇は殺されたり、死刑はまぬかれたり、潜在地たるマンチユアへは幾らも友人を送るを得、云々。ロミウス漸く納得す。法師は尙人目にかゝらぬやうにエローナを去るべしと誨へ、且つ今宵戀人の居間へ楽しく忍べと命ず。夜となる。ロミウス情人を訪ひ、運命神の事を談じて、忍びて時を待てとジュリエットを説諭す。ジュリエットは假裝し

て従ひ行かしめよと乞うて止まず。しかせば追手をかけられて、嚴罰せらるべしと説きて、四ヶ月内にエローへ呼戻さるゝやう計らふ積りなり、もし能はずば、外國へ共に落行くべしと諭す。ジュリエット従ひ、さらばせめてローレンスの手を経て絶えず消息を聞かせたまへと約束す。

東方白みはじむ。「まだ日は見えねども、夜とも呼びかねて」ロミウスとジュリエットと相抱きて別る。

今こそ二人が晝は果て、夜ははじまりぬ、

何となれば彼等の互に於けるは大陽の世界に於けるが如し。

ロミウスは旅商人のやうに打扮ちてマンチュアへ發足す。公爵に愁訴す。深き哀愁に沈む。

ジュリエットも懊惱し憔悴す、されど其悲を隠さんと力む。母ジュリエットの様子の變れるを認めて、慰めんと試む、チツバルトの死を忘れよと諭す。ジュリエット曰く、チツバルトの爲に流し、涙は既に遠き前に乾けりと。母は夫キャピレットに此事を報じ、女の懊惱は結婚せる友達を羨むが爲にあらずやと言ひ、速に夫を迎へしめよと勸む。キャピレット答へて、女はまだ餘りに若し、やうく十六歳、されど婿をさがし見るべしと曰ふ。

さる伯爵の子息パリス婿がねとなる。母はジュリエットに此事を報じ、パリスの「年若きこと、端麗なること、立振舞の優美なること」等を稱讚す。ジュリエット驚駭し、自殺すべしと嚇し、跪きて哀願す。老キ、ピレット入來る。ジュリエット其足下に平伏す。父は女をむすめを恩知らず、不孝者と罵る。

汝の振舞は念入の阿呆とも我儘の骨頂ともいふべし。

物を知らざればこそ天與の福を否み、我が意に逆ふ。

次の水曜日の婚儀を諾せずば勘當して禁錮すべしと怒る。

翌朝ジュリエットはローレンスを訪ひ、事情を述べ、若しパリスとの結婚を避くる能はずんば、直に自殺せんと嚇す。ローレンス困惑す。彼れがジュリエットをロミウスに婚せしめてより未だ五ヶ月を経ざるなり、パリスとの婚儀は七月の十日と定められたり。ローレンスは其若き頃の遍歴中に石や植物や礦物の薬力を學び知りたりと語り、睡眠剤の效能を説明し、勇氣を起さしめ「小さき薬瓶」を渡し、結婚の當日、太陽の未だ昇らぬうちに、之に水を加へ

さて後に飲干さば、脈々に、節々に心地よき眠入り入り、

終には四肢五體に限なく廣がり、

各部より悉く卿が生を奪はん。

さすれば親族は死にたりと思ひて、其祖先の廟に運び行くべければ、其間にマンチュアへ使を送り、ロミオを呼び寄せて、其夜の中にジュリエットを救ひ出だすべしと言ふ。

ジュリエット勇敢にも承諾し、わざと得意の容態して家に歸り、ローレンスの訓誨によりて別人のやうになりたればパリスと結婚すべしと言ひ、最も麗しき晴衣や最も貴き寶石を選び出ださんとして居間に退く。老キャピレットは

ローレンスを稱讚し、直に此事をパリスに傳へんとて出で行く。パリスはジュリエットを訪問し、心酔へるやうになりて、只管其日の速かならんことを冀ふ。

キャピレットは婚禮の盛宴を催すために、其準備に着手し、上無く價貴き品をも買入る。ジュリエットの居間にては乳母パリスを嘗てロミウスを賞めたゝへしより十倍にも賞めたゝふ。「パリスは常にこゝに在す、ロミウスは最早歸り來るとあらじ」萬一にも歸り來まさば夫君と情郎とを有すべきなり、云々。ジュリエットはわざと快げにもてなし、一夜を祈禱に過したければとて乳母を退け、さて後長

枕の底に薬瓶を隠して寢床に就く。内心薬の効験を疑ふ。果して有力なるべしや。蛇其他の毒蟲が廟の中には潜み居らむ。死骸の悪臭を如何にしてか忍ぶべき。息つまりて死なざるべきか。チャバルトの死屍を見るやうに思ふ。冷汗淋漓たり。心の弱らんを恐れて、急に薬水を飲み、やがて胸上に腕を組みて昏倒す。日出時に乳母來りて呼び覺さんとす。「姫よ、餘りに久しく眠りたまふかな、(伯の)やがて起しに來ますべきに」。ジュリエットの死にたるを知りて駭く、母悲み歎く。父、バリスをはじめとして多勢の男女入來る、老キャピレットは泣

く力をも物言ふ力をも有せず。

若し世に悲み歎くべき日ありせば、

痛ましき、不運なる、まがくしき日ありせば、

予は云ふ

けふこそは其日なれと。

此間にローレンス法師は其庵に同棲せるジョンといふ一フライヤー僧に密書を持たせてロミウスの許へ遣す、「すぐ翌宵」廟よりジュリエットを救ひ出だすために來れといふ打合せなり。ジョンはマンチュアへと急ぐ途中、同宗の習慣に従ひ、同行の僧を得んとてさる家に立寄りしが、恰

も時疫流行中として抑留せられ、書の内容を知らざりしゆゑ、翌朝まで遷延す。さる程にキャピレット家にては慶弔悉く顛倒し、伊國の風習通り、ジュリエットに日頃着慣れし衣裳を被せ、わざと顔掩ひをさせで、廟へ送る。ロミウスの僕にして牒者としてエローナに在りし者、葬儀を見て急ぎ主人方へ其報を齎す。ジュリエットの傍にて死なば一段の榮譽ぞと思ひて、ロミウスはエローナへ戻らんと決心す。かくてマンチュアの街頭を漫歩し、ふと一藥劑師の些少の藥函を備へて其貧しき店頭に座せるを見、金を以て賄うて、法度を犯し「殺人藥」たる毒を賣らし

む。

ロミウスは先づ僕ビータアをエローナに遣して廟を掘り穿つ道具類を準備せしむ。且つ墨汁と紙とを求めて事の始終とおのが計畫とを書き記す、其父に送らんためなり。エローナにてビータア提灯と道具とをロミウスに逢うて渡す。ロミウスはビータアを立去らしむるに臨み、明朝早く遺書を父に渡すべしと命ず。廟内に降りて死せるジュリエットを發見し、搔抱きて毒藥を服す。ジュリエットに對ひて獨語す、吾いかで此れに優る榮譽の墓所を得べきと。彼れは死せるチップルトにも物言ひ、キリストに慈惠を禱り、ジュ

リエットの體上に身を抛げ掛けて死す。
ローレンス法師廟を開かんとて來り、廟内の火光に驚く。
ピーター其主人のかしこに在るを告ぐ。ローレンス内に入りてロミウスの死骸を發見す。ジュリエット覺醒す、ローレンス其情郎の屍を示し、忍耐を諫告し、さる尼院にかくまはんと約す。ジュリエット涕泣し、ロミウスの死骸の上に倒れ、あまた、びキッスし、不幸を歎ず。人音を聞きてローレンスとピーターとは逃げ去る。ジュリエットは死を歡迎すと言ひてロミウスの短劍を以て乳の下を貫く。
夜番の役人共魔術家等が死屍を弄びつるならんと假定

して廟内に入り、死骸を發見し、ローレンスとピーターとを拘引し、翌日領主に訴ふ。

群衆廟に集る。領主の命令にて死骸は小高き家に置かる。ピーターとローレンスとを審問す。ローレンスは長々と辨疏をなし、事の顛末を説明す。ピーターの陳述とロミウスの遺書とはローレンスの口供の實なるを證す。領主エスカラス乳母を追放に處し、ピーターを放免す。藥劑師は絞刑に處せらる。ローレンス隠棲に退き、五年の後に死す、齡七十五。情人等の死骸は大いなる大理石の圓柱を以て支へたる莊嚴なる廟の内に置かる。かくて

キャピュレットが妻の甥、チツバルト。

フランシス派の僧、ローレンス法師。

同じ派の僧、ジョン坊。

ロミオの下人、バルセーザー。

キャピュレット家の下人 サムソン。

グレゴリー。

ジュリエットが乳母の下人、ピーター。

モンタギューの下人、エブラハム。

薬種屋の老人。

樂人甲、乙、丙。

パリスの侍童 コシヤウ。他の侍童 コシヤウ。警吏一人。

モンタギューの妻、モンタギュー夫人。
キャピュレットの妻、キャピュレット夫人。
キャピュレットの女、ジュリエット。
ジュリエットの乳母。

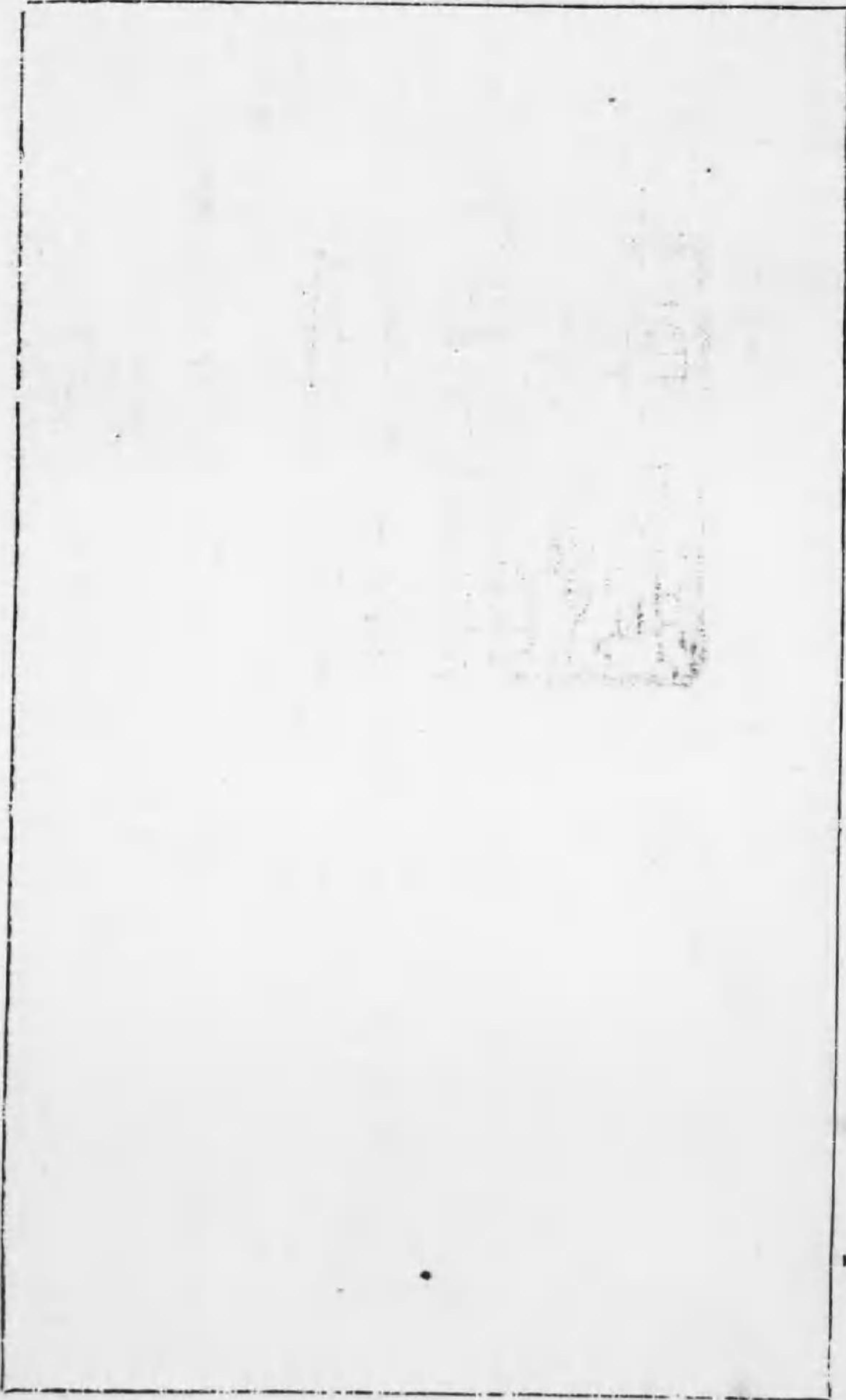
其他エローナの市民。兩家の親族。假裝舞
踏者、門衛、番衆、侍者等。

序詞役。

場所

エローナ。

マンチュア。



ロミオとジュリエット

序詞

序詞役出で来る。

序詞役

威權相如く二名族が、

處は花のゴローナにて、

古き怨恨を又も新たに、

血で血を洗ふ市内鬭争。

サム 予が腹を立つたとなりや忽ち眞二つにしてくれる。

グレ ところが其立つまでが手間が取れう。

サム 何の、すぐ立つわい、モンタギューの飼犬を見ても。

グレ はて、立つと言へば不動ぢや。不動は立往生ぢや。出向うて往かねば闘争にはならぬわ。

サム はて、飼犬にでも向うてゆくわい。モンタギューの奴等と見りや、男でも女

でも闘うたことでない。

グレ へつ、闘はいで放任つておくのがな、それが汝の弱蟲の證據ぢや。

サム したり、そこで兎角弱蟲の女子ばかりが玩弄はれまするとけつかる。いや、

予は、野郎をば抛り、女郎をば制裁はう。

闘戦は主人衆や吾等男共のすることぢや。

サム いざ闘争となりや、そんな斟酌は要らんこつちや。男共を叩きみじいたら、

グレ 女共をもやつつけてくれう。

グレ やつつけける？

サム 彼奴等の額を打破つてくれうわい。意味は如何様にも取らつせいよ。

グレ それは先方の感じ次第ぢや。

サム はて、身に沁々と感じようわい、予も随分と評判の女たらしぢや。

グレ へん、魚でなうて幸福ぢやわい、汝が魚なら、女たらしでは無うて總菜の鹽

大口魚と来てけつからう。……(一方を見やりて) 抜劍け、モンタギューの奴等が

来たわ。

サム 此時モンタギュー家の下人、エブラハムとマルセーザーと一方へ出で来る。

サム さ、抜劍いたわ、闘争を買はつせい、尻押をせう。

グレ 何ぢや！ 尻に帆を掛ける？

サム 心配すない。

グレ 何の、汝を！

サム 此方の非分にならぬやうに、

先方から發端けさせい。

グレ 行違ふ途端に睨みつけてくれ

う、如何思やがらうと關ふも

のかえ。

サム うんにや、如何爲やがらうと

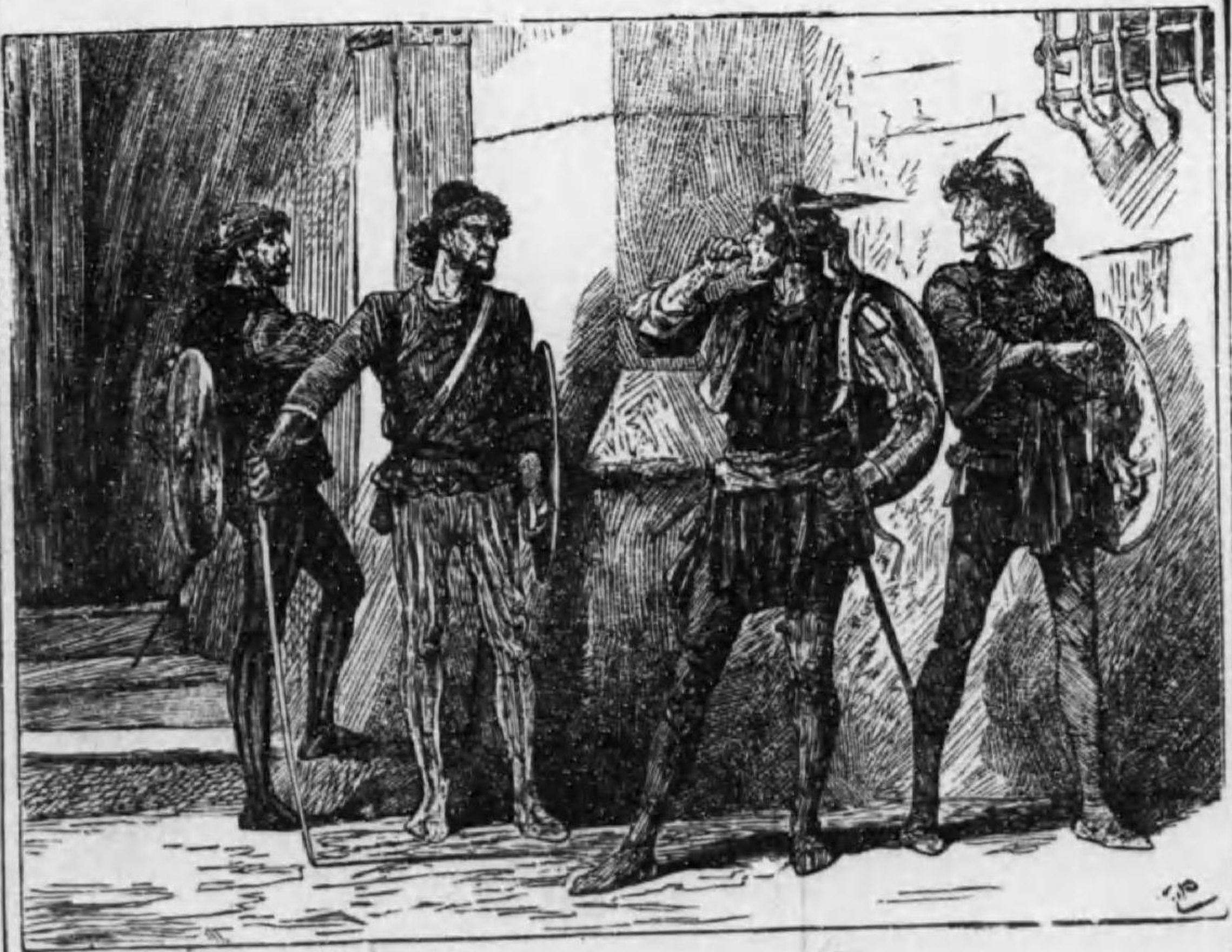
關ふものかえ。予は指の爪を

噛んでくれう、それで黙つて

ゐりや恥さらしぢや。

雙方行違ふ。サムソン指

の爪を噛んで見する。



エブラ 貴所は吾等に對うて指の爪を噛まつしやつたな？

サム 如何にも爪を噛みまする。

エブラ 吾等に對うて噛まつしやるのか？

サム (グレゴリーを顧みて) 然と云うても理分か？

グレ いゝや。

サム (エブラに對ひて) いゝや、足下たちに對うて噛みはせんが噛む。

グレ こりや鬭争を賣らつしやるのぢやな？

エブラ 鬭争！ いや、決して。

サム 鬭争なら敵手にならう。汝等には負けんぞ。

エブラ 勝もすまい。

サム じゝ、……

と語る。此時上手よりモンタギューの親族バンブリアオ出で來る。

グレ (サムソンに對ひ小聲にて) 勝つわいと言はつせい。(下手を見やりて) あそこへ殿の親族の一人が來せた。

サム うんにや、勝つわい。

エブラ 嘘を吐け。

サム 抜け、男なら。グレゴリー、えいか、頼むぞよ、しつかり。

サムソンとエブラハムと劍を抜いて戦ふ。マンブリオ此體を見て駆け來り、劍を抜き割つて入る。

ベンテ 待つたくー！ 藏めい劍を。こゝな向不見が。

キャピユレット長者の甥チツバルト下手より出で來る。

チツバ やあ、下司下郎を敵手にして汝は劍を抜かうでな？ ベンブリオ、こちらを向け、命を取つてくれう。

と劍を抜く。

ベンテ

いや、これは和睦をさせうためにしたことぢや。劍を藏めい、さもなくば予と一しよに、引分くる手傳ひをしておくりやれ。

チツバ

何ぢや、抜劍いてゐながら、和睦ぢや！ 和睦といふ語は大嫌ひぢや、地獄ほどに、モンタギューの奴等ほどに、汝ほどにぢや。卑怯者め、覺悟せい！

突いてかゝる。マンブリオ餘義なく敵手になる。此途端、兩家の關係者双方より出で來り、入亂れて闘ふ。市民及び警吏長等棍棒を携へて出で來る。

警吏長

棍棒組よ、鉾組よ！ 打てー！ 打据ゑいキャピユレットを！ モンタギューを打据ゑい！

キャピユレット長者寢衣のまゝにて、其妻キャピユレット夫人は之れを止めつゝ出で來る。

キャ長

此騒動は何事ぢや？ やあ、予が長い劍を持て、長い劍を。

キャ妻 杖をば、杖をば！ 何の爲に長い剣を？

キャ長 えい、剣ぢやといふに。見いあれを、モンタギューの長者めが來をつて、予に見よがしに刃を揮りをる。

モンタギュー長者白刃を提げ、其妻モンタギュー夫人之れを止めつ、出で來る。

モン長 おのれ、キャビュレットめ！……とめるな、放せ。

モン妻 闘はう爲になら、一步でも出させますな。

領主の公爵エスカラス、從者多勢を引連れて出で來る。

領主 やあ、平和を亂す暴人ども、同胞の血を以て刃金を穢す不埒奴……聞きをらぬな？……やあ、汝等、邪まな噴毒の炎をば己が血管より流れ出る紫の泉を以て消さうと試むる獸類ども、嚴罰を怖るゝならば、其血腥い手から凶暴の剣を抛ち、怒れる領主が宣言を聽け。キャビュレットまつたモンタギュー、

汝等二人の由も無い爭論が原となつて、同胞の鬭争既に三度に及び、市内の騷擾一方ならぬによつて、當エローナの故老共は其ふさはしい老實の飾を脱棄て、何十年と用ひぬため古び錆びついたる銚を把つて、汝等が心に錆びつきし意趣の仲裁に力を費す。向後再び公安を亂るに於ては汝等が命は無いぞよ。今日は餘の者共は皆立退れ、キャビュレットは予に従ひ參れ。モンタギュー、其方は此午後に、尙申し聞かすこともあれば、予が平常の裁判所フリータウンへ參れ。更めて申すぞ、命が惜しくば皆立去れ。

モンタギュー夫婦とベンブリオだけ残りて皆入る。

モン長 此舊い争端を誰が新しく發きをつたぞ？ 甥よ、おぬしは最初から傍近う

おゐやつたか？

ベンゾ いや、傍近う參りました頃には、敵の下人と御家來衆とが既戦うてをりました。それを引分けうとて拔劍きましたる途端に、彼のチャバルトの我武者め

が劍を抜いて駆付け、鬪戦を挑み、白刃を揮廻いて空しう虚空を斬りまする程に、風は習々と音を立て、彼れめが不覺をば嘲る風情。かくて互ひに衝いつ撃つの折から、おひくく多人數馳加はつて、左右に別れ戦ふ處へ、領主が見えさせられて、左右なく引別と相成りました。

モン長 お、ロミオは何處にぢや？ 今日そなた逢はしましたか？ 此騒動に關係うてゐなんだは、何よりも喜ばしい。

ベンテ されば、東の金の窓に朝日影のまだ覗かぬ頃、胸の悶を慰めうとて、郊外に出ましたところ、市からは西の或無花果樹の杜蔭に見れば、其様な早朝に、御子息が歩いてござる、近づけば、それと見て取つて、忽ち杜の繁みへお隠れ。人目を避くるは相身互ひ、浮世を煩う思ふ折には、我身一つでさへも多いくらゐぢや、強ち同志を追はいでも、只我心の後を追うて、人目を避くる人を此方も故と避けました。

モン長

げに、幾朝もく、涙は未乾ぬ露を置添へ、吐息は雲に雲を加へて、彷徨いてゐるを見掛けたとか。されども遠い東方の曙姫の寢所から、活々とした太陽が小昏い帳を開けかくれば、光明を病みて逃戻り、窓を閉ぢ、日を嫌うて、我れから夜を製りをる。良い分別のして此病の根を絶たぬときは、忌はしい不祥の基ぢや。

ベンテ

叔父上には其根をば御ぞんじか？

モン長

いや、知りもせねば知らせもせぬ。

ベンテ

して質問いて御覽じましたか？

モン長

予はもとより、親しい誰彼にも様々と質させたれど、彼れの秘密を知る者とは、爲不爲は知らず、秘し隠す彼れが心其者の外には無いゆる、探るも發見すもいつかな能はぬ、譬へば可憐けな花の蕾が、其うるはしい花瓣を風にも日光にも開かぬうちに、彼の意地悪な螟蛉めにあさましよう食まるゝやう

に。愁歎の源を知りさへすれば、直にも療治がしたうござるが。

此時ロミオ物思ひ顔に一方へ出で来る。

ベンゾ あれ、あそこへロミオどのが。お避しなされませ。嚴う拒ましやれば格別、小生が聞質いて見ませう。

モン長 どうぞ首尾よう自白けさせて下され。我妻、さ、參らう。

モンタギュー夫婦入る。ロミオ近づく。

ベンゾ や、お早うござる。

ロミオ そのやうに早うござるか？

ベンゾ たつた今九時を打ちました。

ロミオ あゝ〜！ 味氣無い時間は長い。……今急いで去んだは予の父でござつたか？

ベンゾ さよぢや。さて如何な味氣ない事があつて、ロミオには、時を長いと被言る？

ロミオ 得れば時が短うなる其物が得られぬゆる。

ベンゾ 戀ぢやな？

ロミオ 人の爲に……

ベンゾ 戀人の爲に？

ロミオ 人の爲に蔑視まれ、戀ひ焦るゝ效もなう。

ベンゾ やれまあ、柔和しらしう見ゆる彼の戀めが、そんな酷いこと、手荒いことをするか？

ロミオ あゝ〜！ 戀めは始終目隠しをしてゐれど、目は無うても存分其的を射てのくる！……何處ぞで食事せうか？……（四下を見廻して）あゝ〜！こりやまあ何たる騒動が？ いや、其仔細は被言るには及ばぬ、残らず聞いたわ。是れ皆憎いが原とは言へ、可愛いにも深い縁ある……すれば是れは憎い可愛さぢや！ 可愛い憎さぢや！ 無から出た有ぢや！ 悲しい戯れ、

沈んだ浮氣、目易い醜さ、重い羽毛、白い煤、冷い火、健康な病體、醒めた眠り！
あゝ、有るがまゝとは同じでない物ぢや！ ま、恰ど其様な切なる戀を感じながら、戀の誠をば感せぬ切なさ！……何で笑ふのぢや？

ベンテ

何のいの、泣くのぢや。

ロミオ

心友よ、何故に？

ベンテ

その心中の苦痛を思つて。

ロミオ

はて、それこそは深切過ぎて却つて迷惑ぢや。自身心痛ばかりでも心臓が痛うなるに、足下までがお泣きやると、一段と胸が迫る。足下の同情は多過ぎる予の悲痛に、只悲痛を添へるばかりぢや。そもく戀の情は溜息の蒸氣に立つ濃い煙ぢや、激しては眼の裡に火花を散らし、窮しては涙の雨に大海の水量をも増す。もしさうでなくば……性根の亂れぬ亂心……息の根を杜むる苦味もあれば、命を維ぐ甘味もある。さらばぢや。

ベンテ

まつた！ 一しよに行かう。予を棄てゝ行かうとは胴慾ぢや。

ロミオ

はて、とうに身を棄てゝしまつた。予は爰にはゐぬ、これはロミオでは無い、ロミオは何處か他所にゐよう。

ベンテ

いやなう、眞實に白狀して下され、貴下が戀ひ慕ふ人とは誰れぢや？

ロミオ

白狀をせいと、予に拷問の苦痛をさせうでな？

ベンテ

拷問！ 何の、然うではないが、白狀をさつしやれ。

ロミオ

はて、それは病人の遺言をば白狀と呼ぶやうなもの、わるいが上にゐる異名ぢや！ が白狀せう、予には戀女がある。

ベンテ

戀と睨んだ時に、それ程は見抜いてゐた。

ロミオ

ても偉い射手ぢや！ そして其女は誰が目にも立つ美人ぢや。

ベンテ

はて、目に立つ的ならば、射て落すことも容易からう。

ロミオ

いや、其規は外れた。戀愛神の弱弓では射て落されぬ女ぢや。處女神の

徳を具へ、貞操の鐵の鎧に身を固めて、戀の稚い孱弱矢なんどでは些小の手創をだに負はぬ女。言寄る語に圍まれても、戀する眼に襲はれても、いつかな心を動かさぬ賢人を墮落さする黄金にも前垂をば擴げぬ。おゝ、限りない美しさには富みながら、其美しさは只一代限り、死ねば種までも盡くるとは、貧乏いゝ運命!

ベンゾ

すれば其女は嫁入をせぬ決心ぢやな?

ロミオ

さうぢや、其物吝みが甚い損失。折角の美しさが、其偏屈ゆるゑに餓死して美を子孫には能う傳へぬ。美しうて賢うて、予を思死さする程に賢過ぎた美人ぢやゆるゑに、恐らくは冥利に盡き、よも天國へは登れまい。彼女が戀をせぬと誓うたによつて、斯うして物は言ふものゝ、予や生きながら死んでをるのぢや。

ベンゾ

まゝ、予の言ふことを聽かつしやれ。其女を忘れさつしやれ。

ロミオ

おゝ! どうしたら忘れられうか、教へて下され。

ベンゾ

目に自由を興へて、ちと餘所の美人を見やしやれ。

ロミオ

餘所のと較ぶれば較ぶる程、彼女を絶世ぢやと言はねばなるまい。美人の額に觸るゝ彼の幸福な假面

どもは、孰れも黒々と製つ

てはあれど、それが却つて

其底の白い面を思出さす

る。目がつぶれても、昔見

た目の寶は忘れぬ例ぢや。

如何な拔群な美人をお見せやらうと、それは只其拔群な美をも抜く拔群な美人を思出さす備忘帳に過ぎぬは定ぢや。さらば。忘るゝ法を教ふることは足下の力では出来ぬ。



ベンチ 教へかたの不足分は其中に償はう 負債方になつたまゝで死にたうない。
二人ともに入る。

第二場 同處 街上。

キヤピユレット 長者を先に年若き貴公子パリス下人一人従いて出で来る。

キヤ長 モンタギューとても右同様の懲罰にて謹慎の仰附けられました。したが吾々老人に取つては、平和を守り申すこともさまで困難しうはあるまいでござる。

パリス 何れも名譽の家柄でゐさせらるゝに、久しう確執のなされたは氣の毒な儀

キヤ長 でおじやつた。時に吾等が申入れた事の御返答は何とぢや？

先度申した通りを繰返すまでいござる。何分にも世間知らず、まだ十四度とは年の變移目をば見ぬ女、せめてもう二夏の榮枯を見せいで、適齡とも思ひかねます。

パリス 姫よりも若うて、見事母親になつてゐるのがおじやる。

キヤ長 いや、速う成るものは速う壞るゝ。末の頼みを皆枯いて、只一粒残つた種子、此土で頼もしいは彼兒ばかり。さりながら、パリスどの、先づ言寄つて女の心をば動かしめされ。彼女の諾否が肝腎、吾等の意志は添物、女が諾く上は吾等の承諾は其取舍の外には出ませぬ。今宵家例に因り、宴會の催し申して、日頃別懇の方々を多勢客人に招きましたたが、貴下が其組に加はらせらるゝは一段と吾家の面目にござる。今宵陋屋にて、地を踏む明星が群れ輝き、暗天をさへも明う照らすを御覽あれ。譬へば緩漫い冬の後へに華かな

春めが来るのを見て、血氣壯な若い手合が感ずるやうな樂しさ、愉快さを、蕾の花の少女らと立交らうて、今宵我家で領せられうす。悉く聞き悉く視て、さて後に最も價値のあるのを取らしやれ。熟と觀ると、大概は、女も其一人でござるが、數には入つても勘定には入らぬ習ひぢや。さゝ、一しよにござれ。……(下人に)やい、汝はエローナ中を駆廻つて(書附を渡し)爰に名前の書いてある人達を見附けて、今宵我邸で懇に御入來をお待申すと言へ。

ギヤビユレット長者とパリスと入る。

下人
こゝに名前の書いてある人達を見附けい！ えゝと、靴屋は尺で稼げか、裁縫師は足型で稼げ、漁夫は筆で稼げ、書工は網で稼げと書いてあるわい。こゝに名前の書いてある人達を見附けて來と言附かつたが、書手が如何様な名前を書きをつたやら、こりや一向に見附からぬわい。學者の處へ往かにやならぬ。……(一方を見て)お、ちやうどよい。

ベンゾリオ先にロミオ従いて出で來る。

ベンゾ
そこがそれ、火で火を壓へ、苦で苦を減する例ぢや。目が眩うたのを癒すには逆に回轉るに限る、死ぬる程の哀愁も別の哀愁で忘るゝ習ひぢや。目に新しい毒を染ませて舊い毒を殺したがよい。

ロミオ
それには車前草が妙であらう。

ベンゾ
それとは？

ロミオ
脛の傷には。

ベンゾ
ロミオ、貴下は氣が狂うたか？

ロミオ
氣は狂はぬが、狂人よりも辛い境界……牢獄に鎖込められ、食を斷たれ、答たれ、苛責せられ……(下人の近づいたるを見て)や、機嫌よう。

下人
はい、御機嫌ようござりませ。旦那は能う讀ましやりますか？

ロミオ
いかに……不幸に逢うて此身の不運を解むわい。

下人 はて、その様な事は書が無くても知れましょ。 いや、眼で読むものをば讀
ましやりますかと聞きますのぢや。

ロミオ されば、其文字や其言語を知つてをればなう。

下人 正直なことを言はつしやる。 御機嫌ようござらつしやれ！

下人行きかくる。

ロミオ まて〜、讀めるわい。

下人より書附を受取りて讀む。

マーチノー殿、同じく夫人及び令嬢方。 アンセルム伯、同じく美しき

令妹達。 ギトルギオ殿後室。

ブラセンシオ殿、同じく可憐なる姪御達。 マアキュシオ、同じく家弟ヴ

レンタイン。

叔父キ、ユレット殿、同じく天人、同じく令嬢達。 麗しき姪のロザリン。

リギヤ。

ワレンシオ殿、同じく令甥チップバルト。 ルシオ及び快活なるヘレナ。

書附を下人に返しながら。

美人揃ぢや。 何處へ集るのぢや此手合は？

下人 え、あの……

ロミオ え、あの夜會にか？

下人 手前方へ。

ロミオ 手前方とは？

下人 主人方へ。

ロミオ いかさま、それを真先に問ふべきであつた。

下人 問はつしやらいでも申しませう。 手前主人はキャピユレット長者でござりま

す。 若し貴下がモンタギュー家の方でござらつしやらぬならば、來せて酒

盃を取らしやりませ。御機嫌ようござりませう！

下人入る。

ベンゾ 其キャビュレットの例會に、足下の戀ひ慕ふロザリンが、此エローナで評判のあらゆる美人達と同席するは好都合ぢや。そこへ往て、昏まぬ目で、予が見する或顔とロザリンのを見比べやつたら、白鳥と思つておゐやつたのが鴉のやうにも見えうぞ。

ロミオ 信仰の堅い此眼に、假にも其様な不信心が起るならば、涙は炎とも變りなれ！何度溺れても死にをらぬ此明透る異端め、嘘を言つた科で火刑にせられをれ！何ぢや、予の戀人よりも美しい！何もかも見通しの太陽でも、現世創つて以來、又とは彼女程の女をば見なんだ。

ベンゾ さ、傍に誰れも居ず、右の目にも左の目にもロザリンばかりを懸較べておゐやつた時には、美しいも見えつらうが、其水晶の秤皿に、今宵予が見する或目

ロミオ ざましい美人を懸けて、さて後に其戀姫どのと貫目を較べてお見やつたなら、今は最善う見ゆるのが最早善うは見えまいぞや。それを見たらは無けれど、自分の、美麗さを見ようために、一所に往かう。

に入 二人共る。

第三場 同處。キャビュレット邸の一室。

キャビュレット 夫人を先に、乳母従いて出で来る。

夫人 乳母よ、女は何處にぢや？ 呼びやいの。

乳母 はれま、十二年の潔白を賭けまするがな、來れと言つておいたに……（奥に向ひて）もしえ、羊兒さん！もしえ、姫鳥さん！……けつぱい！……あの兒

は何處へ往かしやつたか！……もしえ、ジュリエットさん！

ジュリエット 出で来る。

ジュリ 何え！ 呼びやるのは誰れぢや？

乳母 お母さまぢや。

ジュリ 母さま、参りました。何御用でござ

ります？

夫人 用とは斯うぢや。乳母や、ちつとの

間退席してたも、内密の話ぢやによ

つて。……いや、乳母、戻りや、一通

り聴いておいて貰うたはうがよかつ

た。其方も知つての通り、女の齡も

喃、既おひく適齡ぢや。



乳母 はい、存じてをりますとも、嬢さまの年齢なら、何時間と言ふことまで。

夫人 まだ眞實の十四にはなりません。

乳母 ならつしやりませぬとも、此齒を十四本賭けますがな……と言つても、其十四

本が、ほんに、もう只四本しかござりませぬわい。……初穂節(八朔)までは

最早幾日でござります？

夫人 二週間と零餘が幾らか。

乳母 零餘が如何あらうと、一年三百六十日の中で、初穂節の夜になれば、恰どお

十四にならしやります。スーサンと嬢とは……南無極樂往生！……同い齡で

ござりました。スーサンは神様のお傍に居ります、私には過ぎた奴でござ

りました。……それはさうと、只今申しました通り、初穂節の夜になると、

恰どお十四にならしやります、大丈夫でござります、はい、善う覚えて居り

ます。地震があつてから恰ど最早十一年目……忘れませぬ……一

年三百六十日の中で、はい、其日に乳離れをなされました。妾が乳首へ芥子粉を塗つて鳩小舎の壁際で日向ぼつこりをして……殿様と貴下はマンチュアにござらしやりました……いや、まだ……老きやしません。それはさうと只今も申しました通り、妾の乳の尖所の芥子粉を嘗めさつしやると、苦いので、阿呆どのがむづかつて、乳をなあ憎がつて！すると鳩小舎ががたがた。もう奔走するにや及ばんと思つたわいの……それから既十一年ぢや、其時單身立をさつしやりました、いや、眞の事ぢや、彼方此方と駆廻らしやつて、恰ど其前の日に小額に怪我をさしやつて……其時亡夫が……南無安養界！面白人だなあ……嬢を抱起いて「これ、俯向に轉倒ばしやつたな？」今に一段伶俐者にならつしやると、仰向に轉倒ばつしやらう、なあ、嬢？」と言ふとな、ま、いかなこと、此お兒がいの、ふいと啼止つしやつて、「唯」ぢやといの。(笑ふ) 戯談が今となつて眞の事になつたと思ふと！ほんに

夫人

乳母

「、千年生きたとてもこれが忘れられることかいな。「仰向に轉倒ばつしやらう、なあ、嬢」と言ふと、阿呆どのが啼止つて、「唯」ぢやといの。(笑ふ) もうよい、もうよい、お黙り。

はい、黙りまする、でもな笑はいではをられませぬ、啼くのを止めて「唯」と言はつしやつたと思ふと。でもな、眞實に小額の處に雛鶏のお翠丸程の大きな腫瘤が出来ましたぞや、危いことよの、それで甚う啼入らしやつた。亡夫が「これ、俯向に轉倒ばしやつたか？今に適齡にならつしやると仰向に轉倒ばつしやらう、なあ、嬢？」といふとな、啼止つて「唯」ぢやといの。(笑ふ) そして汝も黙りや。黙つてたもと言へば。

ジュリ

乳母

はい、もうしまひました。南無冥加あらせたまへ！多勢育てた嬰兒の中で最ら可憐であつたはお前ぢや。其お前の御婚禮を見る事が出来れば、予や本望ぢやわいの。

夫人 さ、其婚禮の事を話さうとしたのぢや。 女よ、其方は婚禮がしたいか、どう

ぢや。

ジユリ 其様な名譽事は、妾やまだ夢にも思つてゐぬ。

乳母 ま、名譽事といの！ わしばかりが乳を献げたので無かつたなら、其智慧は

乳から入つたとも言ひませうすに。

夫人 ならば今、よう思つて見や、其方よりも年下の姫御前で、とうに、此エローナ

で、母親におなりやつたのもある。 予も、今思へば、其方と同じ程らひの年

齢に嫁入つて、其方を生けました。 摘まんて言へば斯うぢや、あのパリス殿

が其方を内室にしたいといの。

乳母 ま、あのよな！ 姫さまえ、あのよなお方、世界中の女衆が……ほんに奇麗

な、蠟細工見たやうな。

夫人 此エローナに夏が來ても、あのやうな花は咲かぬ。

乳母 ほんに花ぢや、眞實の活きた花ぢや。

夫人 どうぞい、あのやうなお方を可愛いと思はぬか？ 今宵の宴會には彼方

も見ゆる筈、パリス殿の顔といふ一巻を善う讀んで、美しう物してある懐し

い意味を意味はや。 顔中のどこもく釣合が善う取れて、何一つ不足はな

いが、萬一にも吞込めぬ不審があつたら、傍註ほどに物を言ふ眼附を見や。

したが此戀の一巻に、只一つ足らはぬこと、いふは、表紙がまだ附かいで美

しい綴目が無い。 魚はまだ沖中にぢや。 總じて内の美を窺むは外の美の

身の譽れ、金玉の物語を金の釣子に抱かせたなら、誰が目に見ても寶卷ぢや。

殿御の譽れは妻の譽れ、嫁入をしたとても其方に何の損も無いのぢや。

損どころかいな！ 女子は男ゆるゑに肥るわいの。

夫人 ちやつと言や、其方はパリス殿をお好きやろかの？

ジユリ さあ、好いても見ようわいの、見て好かるゝものなら。 したが妾の目の矢

頃は、母さまの許さつしやる限を力ぢや、それより深うは射込まぬ。

下人 出で来る。

下人

お方さま、お客人も渡らせられ、御膳部も出ました、貴下をばお召姫さまをばお尋ね、乳母どのは庖厨で大小言、何もかも大紛亂。小僕めはこれからお給仕に参らにやなりませぬ。すぐに渡らせられませい。

夫人

すぐ行こ。(下人入る)……ジュリエットや、さ、若伯が待つてぢや。

乳母

さ、早う往て、嬉しい晝に嬉しい夜を添へさつしやれ。

皆々入る。

第四場 同處。街上。

廻國巡禮に假装したるロミオを先に、マアキユシオ、ベンゾリオ、おの

く思ひくの假装、他に五六人、いづれも道化たる假面を携へ、炬火持、太鼓係等多勢ひきつれて出で来る。

ロミオ

何と、例の通りに断口上を言うて入場つたものか、但しは無しにせうか？

ベンゾ

あのやうな冗繁いことは最早流行らぬ。肩飾で目隠をしたキュービッドに彩色した鞆形の小弓を持たせ、鳥追童のやうに娘共を追廻さするのは最早陳い。それから後見に附けて貰うて覺束無げに例の入場の長白を述べ、るのも嬉しう無い。先方が如何思はうとも、此方は此方で、思ふ存分に踊りぬいて還らう。

ロミオ

(炬火持に對ひ) 予に炬火を與れい。予には迎も浮かれた真似は出来ぬ。餘り氣重いによつて、寧ろ明いものを持たう。

マアキユ

いや、ロミオどの、是非とも貴下をば踊らせねばならぬ。



ロミオ いやく、滅相な。 貴下の舞踏靴の底は軽いが、予の心の底は鉛のやうに重いによつて、踊ることはおろか、歩きたうもない。

マアキユ はて、貴下は戀人ではないか？ すればキュービッドの翼でも借りて、鴉や鳶のやうに翔つたがよからう。

ロミオ 彼奴の箭先にかゝつてゐるゆるゑ、翼を借りたとても翔られぬわい。 鳶や鴉のやうにも飛べず、悲しい思ひに繋がれてゐるゆるゑ、鷹のやうに高うも飛べぬ。 戀の重荷に壓伏けらるゝばかりぢや。

マアキユ 何ぢや、壓伏ける？ あの戀に重荷を？ さりとは溫柔しい者を慘酷しう扱うたものぢや。

ロミオ なに、戀を溫柔しい？ 溫柔しいどころか、粗暴な残忍い者ぢや。 荆棘のやうに人の心を刺すわい。

マアキユ はて、戀めが残忍いことをすれば、此方からも残忍うしたがよい。 刺しをつ

たら、此方からも刺して、壓倒したがよい。(従者を顧みて)……面を隠す假面を與りや。

従者より假面を受取り、被らうとして

醜男面に假面は無用ぢや！(と假面を抛出したがら)誰れが皿眼で此見ともない面を見やがらうと儘ぢや！出額が赧うなるばかりぢやわい。

ベンヂ

さあ〜、敲戸いて入つたり。入つたらば、直一しよに踊り出さうぞよ。

ロミオ

(従者にむかひ)予には炬火を與りや。氣の軽い陽氣な手合は、舞踏靴の踵で澤山敷草を擦つたがよい。予は、祖父の訓言通りに蠟燭持をして、高見の見物をせう。「好い目が出ようと、中止めるは老功い」ぢや。

マアキ

へん、黒いは鼠と來れば夜警吏の定文句ぢや。おい〜、足下が「黒馬」なら「沼」ではない、恐惶ながら、足下が首つたけ没つてこざる戀の淵から引上げてくれうに。……(皆々に對ひ)さあ〜、どうした、こりや晝の炬火ぢや。

ロミオ

何の其様なことがあらう。

マアキ

はて、斯う愚圖々々してゐるのは、晝間炬火を燃けてゐるやうぢやと言ふのぢや。これ、五智に只一度といふが分別智の本來ぢやが、予の言ふこと爲ることには、不絶も分別智が五度も働く。本意を善う味うておくりやれ。

ロミオ

はて、會へ行かうといふ分別はわるうないが、行くのは本意でない。

マアキ

とは何故に？

ロミオ

昨夜予は夢を見た。

マアキ

予も見た。

ロミオ

そして貴下の夢は？

マアキ

空想家は兎角噺語や空語を言ふものぢやといふことを。

ロミオ

噺語や空語の中にも動かぬ眞理が籠つてある。

マアキ

お、それならば、あの足下は、昨夜マブ媛(夢妖精)とお臥やつたな！ 彼

奴は妄想を産まする産婆ぢや、町年寄の指輪に光る瑪瑙玉よりも小さい姿で、芥子粒の一群に車を牽せて、眠つてゐる人間の鼻柱を横切りをる。其車の輻は手長蜘蛛の脛、天蓋は蝗蟲の翼、鞆は姫蜘蛛の絲、頸輪は水のやうな月の光線、鞭は蟋蟀の骨、其革紐は豆の薄膜、御者は懶惰な婢の指頭から發掘す彼の圓蟲といふ奴の半分がたも無い鼠裝束の小さい羽蟲、車體は棧の實の殻、それをば太古から妖精の車工と定つてゐる栗鼠と蟻蟻とが製りをつた。さて此様な行装で、彼奴が毎夜々々、戀人共の頭腦の中を馳廻ると、それが忽ち種々の夢となる。廷臣の膝を走れば平身低頭の夢となり、代官人の指を走れば忽ち謝金の夢となり、美人の唇を走れば忽ち接吻の夢となる。……其唇を、時とすると、マブめ、腹を立つて水腫に爛れさせをる、息が香葉子で臭いからぢや。或はまた廷臣の鼻の上を走る、と叙任を嗅出す夢を見る、或は猷納豚の尻尾の毛で牧師の鼻を擦ると、僧め、寺領が殖えた

見る。或は兵卒の頸筋元を駈廻る、すると敵の首を取る夢やら、攻略め、伏兵やら、西班牙の名劍やら、底抜の祝盃やら、途端に耳元で陣太鼓、飛上る、目を覺す、おびえ駭いて一言二言祈をする、又就眠る。乃至は眞夜中に馬の鬣を紛糾らせ、又は懶惰女の頭髮を滅茶々に纏れさせて、解けたら不幸の前兆ぢやなぞと氣を揉まするもマブが悪戯。或は娘共が仰向に臥てゐる時分に、上から無上に壓迫けて、つい忍耐する癖を附け、難なく強者にしてのくるも彼奴の業。乃至は……

ロミオ

しつゝ、もう止めた、止めた！ 足下は意義もないことを被言る。

マアキユ

さもさうず、夢の話ぢや。夢は空想の兒で、役に立たぬ腦から生るゝ。そ

もく、空想は、空氣よりも仄らもので、今は北國の結氷に言寄るかと思へば、忽ち腹を立て、吹變つて、南の露に心を寄する其風よりも浮氣なものぢや。其風に似た浮れ話に大分の時が潰れた。ようせぬと夜會が果て、時後れ

になつてしまはう。

ロミオ

(獨語のやうに) 予はまた早まりはせぬかと思ふ。運の星に懸つてある或怖しい宿命が、今宵の宴に端を開いて、世に倦み果てた我命數を、非業無慚の最期によつて、絶たんとするのではないか知らぬ。とはいへ一生の航路をば一へに神に任いた此身!……(一同に對ひ) さ、往かつしやれ、元氣な人達。

ベンゾ

さ、太鼓を鳴らせ。

一同揃うて入る。

第五場 同處。キャビユレット邸の廣間。

樂人共控へてゐる。給仕人共布巾を携へて出で來り、取散らしたる盃盤をかたづくる。

甲給仕

ポトバンは何處へ往せた、かたづける手傳ひをしをらぬ? かたづけ役の

癖に! 拭役の癖に!

乙給仕

饗應の式作法一切を、一人や二人の洗ひもせぬ手でしてのくるやうでは、穢

いことぢや。

甲給仕

疊椅子を彼方へ、膳棚もかたづけ、よしか、其皿も頼んだ。おい、杏

菓子を一片だけ取除いてくりや。それから足下、深切があるなら、門番に

さう言うて、スーサンとネルをやらせてくりや。(奥に向つて)……アントニ

ー! ポトバン!

丙(ポトバン)と丁(アントニー)と出で來る。

丙

唯、こゝにゐるわい。

甲給仕

足下をば、大廣間で、最前から呼ばつてぢや、探してぢや、尋廻してぢや。

丁

さう彼方此方に居ることは出來んわ。(一同に對ひ) さ、働いたく。暫時

ちや、働いたく。さうして長生すりや持丸長者ちや。

一同かたづけながら入る。

キャピユレット長者を先に、ジュリエット及び同族の者多勢一方より出て来り、他方より出て来る賓客の男女及びロミオ、マアキュシオ等假装者の一群を迎ふる。

キャ長

(ロミオの一群に) ようこそ、方々！ 肉刺で患んで居らん婦人は、何れも喜んで舞踏敵手になられうわい。……(婦人連に對ひ) あゝ、はあ、姫御前たち！ 舞踏るを否ちやと被言る仁があるか？ 品取つて舞踏らしやらぬ仁は、誓文、肉刺が出来てゐるのちや。何と圖星であらうが？……(ロミオ等に對ひ) ようこそ！ 吾等とても假面を被けて、美人の耳へ氣に入りさうな話を囁いたこともござつたが、あゝそれは既う過去ちや、遠い過去ちや。……方々、ようこそ來せられた……(樂人を顧みて) さゝ、樂人共、はじめい。……(一同に對

ひ) 開いたく！ つつと開いて、さゝ、舞踏つたり娘達。

樂を奏しはじむる。男女手を取りあうて舞踏る。

もつと燭火を持って、家來共！ 食卓を疊んでしまうて、爐の火を消せ、餘り室内が熱うなつたわ。……あゝこりや思ひがけん好い慰樂であつたわい。……(同族の一老人に對ひて) いや、叔父御、まゝ腰を下さしめ、貴下も予も最早舞踏時代を過いてしまつた。お互ひに假面の着けて以來、もう何年にならうの？

キャ叔

大丈夫、三十年ちや。

キャ長

何と被言る！ まさかに然程ではない、まさかに。リュセンシオの婚禮以來ちやによつて、すぐ鼻の先にペンテコスト(祭日)が來たとして、二十五年、あの時に被假面つたのちや。

キャ叔

いや、もそつと經つ、もそつと。彼れの忤がもそつと年を取つてをる。も

う三十ちや。

キヤ長 確と被言るか？ あの悴は、つい二年程前かたまでは、後見人が附いてをつた。

此間ロミオは道化假面を被つたるまゝ、獨り離れて見てゐる。其中ジュリエットと一武官と手を取りあうて舞踏りはじむる。

ロミオ (傍の給仕に對ひて) あの武家と手を取りあうてござる彼姫は何誰ぢや？

給仕 小僕は存じませぬ。

ロミオ おゝ、あの姫の美麗さで耀く燭火が又一段と輝くわい！ 夜の頬に照映ゆ

る彼の姫が風情は、宛然黒人種が耳元に希代の寶玉が懸つたやう、使はうには餘り勿體無く、下界の物としては餘り靈妙じい！ あゝ、あの姫が餘の女共に立交らうてゐるのは、雪はづかしい白鳩が鴉の群に降りたやう。此一舞踏が濟んだなら、姫の居處に目をつけ、此賤しい手を、彼の君の玉手に

觸れ、せめてもの男冥利にせう。 あゝ、予は今までに戀をしたか？ やい、眼よ、せなんだと誓言せい！ 今夜といふ今夜までは眞の美人を見なんだわい。

此中來賓中のチツパルト此聲を聞告めたる思入にて前に進む。

チツパ あの聲音はモンタギュー家の奴に相違ない。……(從者に對ひ)予が細刃劍を持つて……何ぢや？ 下司奴めが、道化假面に面を隠いて、此祝典を踏附にせうとは不埒ぢや！ キヤピュレットの正統たる權利を以て、彼奴めをば打殺しても予や罪惡とは思はぬわい。

キヤ長 はて、甥よ、何としたのぢや！ おぬしは何で其様に息巻くのぢや？

チツパ 叔父上、あれは敵方のモンタギューでござる。 今夜の祝典を辱めう惡意を

抱いて來をつたのでござる。

キヤ長 年若のロミオではないか。

チツバ でござる、そのロミオ奴でござる。

キヤ長 まゝ堪忍して放任て、おさめされ、立派な紳士らしい立振舞うてをる上に、實を言へば、日頃エローナが、徳もあり行状もよい若者と自慢の種にしてゐるロミオぢや。全市の富に易へても、我家で危害を加へたうない。ぢやによつて堪忍して見ぬ介をしておゐやれ。これは子の意志ぢや、子を重んじておくりやらば、顔色を麗しうし、其むづかしい貌を止めておくりやれ、祝宴最中に不似合ぢやわい。

チツバ いや、不似合でござらん、あのやうな奴が居をるからは。 堪忍はなりませぬわい。

キヤ長 はて、堪忍せにやなりません。 これさ、どうしたものだ！ せにやならぬといふに。 これさく、この主長は乃公では無いか、汝か？ さゝゝ。 汝が堪忍ならん！ はれやれ、汝は來賓中に大闘争を起させうぞよ！ 大騒

チツバ 動を爲出來さうわ！ えゝ、汝のやうなのが、その！

キヤ長 さゝゝ、没分曉漢ぢや。 確と然様か？ 其様なことをすれば身爲になるまい。……すれば何ぢやな、では乃公の命令を聴かぬ！ はて、今が時ぢや。……(來賓の方に向ひて)ようく、出來た！ (又チツバルトに對ひ)向不見にも程があるわさ、さゝゝ。 はて、靜かに、若し……(從者を顧みて)もそつと燭火を持って、燭火を！……(又チツバルトに對ひ)どうしたものでや！ 是非とも靜かにして貰はう。……(來賓に對ひ)陽氣に〜！

チツバ 無理往生の堪忍と持前の疳癩との出逢ひがしらで、挨拶の反が合ぬゆゑ、肉體中が顫動するわい。 引退らう。 併し今こそ甘つたるう見えてをる汝が今夜の推參に、やがて苦い味を見せてくれう。

チツバルト 入る。

此間にはロミオは假面のまゝ、巡禮姿のまゝにてジュリエットに近づき、膝まづきて恭しく其手を取る。

ロミオ 此賤しい手で尊い御堂を汚いたを罪とあらば、面を赧うした二人の巡禮、此唇めの接觸を以て、粗い手の穢いた痕をば滑かに浄めませう。

ジュリ 巡禮どの、作法に善う合うた御信仰ぢやに、其様におしやつては其お手に甚い氣の毒。聖者がたにも御手はある、其尊手に觸るゝのが巡禮の接吻禮とやら。

ロミオ でも聖者にも唇があり、巡禮にも唇がござりまする。

ジュリ さあ、それはお祈願に用ふる習ひぢや。

此問答のうちに二人はやゝ群衆と離るゝ。

ロミオ おゝ、いでさらば、我聖者よ、手の爲す所爲を唇に爲さしめたまへ。唇めが祈りまする、聽させられい、さもなくば信心が破れ、心が亂れまする。

ジュリ 切なる祈願の心は酌んでも、動かぬが聖者の心ぢや。

ロミオ それならば、動かしやるな、祈願の御報を賜はりまする。

接吻する。

ジュリ 斯うして予の罪を此唇から押拭うて貰うたのぢや。

ロミオ なりや其罪が妾の唇へ移つたのぢやな？

ジュリ 何、罪が移つた？ おゝ、嬉しうもお咎めあつたぞ！ 其罪を戻して下され。

又接吻する。

ジュリ まあ御均等な。

乳母出て来る。

乳母 姫さま、お母さまがお話がありますといな。

これにてジュリエット離るゝ。

ロミオ あの方の母御とは何誰ぢや？

乳母

はて、お若いの、母御は此郎の内室さまちやがな、よいお仁で、お發明な、お貞節な。妾は今貴下が話してござらしやつた嬢さまを育てました。もしえ、あのお子を手に入れさしやる御仁は、澤山貨幣にもありつきますぞや。

乳母離るゝ。

ロミオ

キャピュレットの女か？ お、怖しい勘定狂はせ！ 子の命は、こりやもう敵からの借物ぢやわ。

此時ベンブリオ近寄りて。

ベンブ

さゝ、歸らう。もう娛樂が頂點ぢや。

ロミオ

いかさま、予もさう思ふ。(獨語のやうに)それゆゑにこそ心の不安。

キヤ長

あいや、方々、お歸り支度をなされな。粗末な點心ながら、只今準備中にござる。(皆々代るゝ長者に近づきて小聲に挨拶して歸りゆく)……でござるか？ はて

然らば、何れも忝なうござつた。かたじけなうござる。機嫌ようござりませ。……(從者に向ひ)もそつと燭火を持て、こゝへ！……(賓客を送り果て、家人の方に向ひ)さゝ、此上は寢よう。あゝ、こりや實に、夜が更けたわ。どりや予も休まよう。

一同次第に入る。ジュリエットと乳母と残りて出行く容を見送る。

ジュリ

乳母、こゝへおじや。あのお方は誰れぢや？

乳母

タイピリオさまのお嗣子でござります。

ジュリ

さいな、ペトルチオさまの若でござりましょ。あの方は、ありや誰れぢや？ 後から行かしやる……踊らなんだ人ぢや。わしも存じませんわいの。

ジュリ さ、問うておじや。……

乳母 離るゝ。

もう婚禮が済んでぢやなら、墓が妾の新床ぢや。

乳母 戻り来る。

乳母 名はロミオと言うて、お邸とは敵どうしのモンタギュー家の若ぢやといな。

ジュリ (獨語のやうに) 類無い戀が、類ない憎怨から生れうとは！ 知らいで早う見知

りあうて、今更晩う然うと知つたか！ あさましい因果な戀ぢや、憎い〜

敵をば可愛いと思はにやならぬ。

乳母 え、何ぢやいな、それは？ 何を言うてぢやいな？

ジュリ 歌ぢや……今がた一しよに舞踏つた人に教へて貰うた歌ぢや。

奥にて「ジュリエット」と呼ぶ。

乳母 はいく、只今！……さう、参りましょ。 お客人は皆もう歸つてしまはし

やれた。

ジュリエットを促して入る。



第二幕

序詞役 入来る。

序詞役

扱も老いたる情慾は方に最期の床に眠り、
 今又若き戀情が跡を襲はんとて起出づる。
 曾ては爲に死なんとまで呻き憧れつる美女も、
 今は既美とも見えずジュリエット姫に比べては、
 かくて戀ひつ戀はれつ二人一様に色に迷へり、
 然はあれと歎顔に敵の子に言寄る辛さ、
 女もまた鉤より戀の甘餌を盗む怖しさ。

第一場 エローナ。 キャピュレット邸庭園の石垣に沿へる小逕。

ロミオ 出で来る。

敵どしなれば誓約をも世の人並には告げがたく、
 姫も同じ思ひながら逢ふべき傳手は更に少なし。
 しかはあれ情火は力を、時は便宜を與へしかば、
 限なき危さの中に二人は限なく嬉しく逢へり。

序詞役 入る。



ロミオ 魂が此處に残つてあるのに、何で歸ることが出來うぞい？ 鈍な土塊め、身を翻やいて、おのれの中心を捜しをれ。

石垣を攀ちて庭内へ飛下りる。

ベンゾリオとマアキユシオと出て來る。

ベンゾ ロミオ！ ロミオどの！ ロミオ！

マアキユ 彼奴め伶俐者だから、一定とうに拔駈して、今頃は臥てゐるのであらう。

ベンゾ いや、此方へ走つて來て、此石垣を飛越えた。マアキユシオどの、呼ばつて見さつしやれ。

マアキユ いや、序に祈り出して見よう……（呪文の口真似にて）ロミオよ！ 浮氣よ！

狂人よ！ 煩惱よ！ 戀人よ！ 溜息の姿にて出現めされ、たんだ一句を

でも宣言せられたならば、小生は満足いたす。只「嗚呼はれ」と叫ばしめ、たんだ一言、戀とか鳩とか宣言せられい。此方の昔馴染のギーナス殿を美め

さしませい、乃至は盲目の息子殿、例のコフィチュアの王様が乞食娘に惚れた時分に、見事圖星を射中てたといふ彼の弓取のキュービッドに、何とか綽號でも附けさつしやれ……聞えぬな、動かぬな、出て來ぬな。はて、お猿どのは亡くなられたさうな。こりや彌々祈らねばならぬ……（又祈禱の口真似）あはれ、ロザリンの彼の星のやうな眼附、あの高々とした額、あの真紅の唇、あの可憐しい足、あの真直な脛、あのぶる／＼と顫へる太股乃至は其近邊にござる處々に掛けて祈りまする、速かに御正體をば現しませい。

ベンゾ 聞えたら腹を立たうぞ。

マアキユ 何の腹を立たう。若し戀女の身近くへ奇異な魔物を祈り出して、彼女が調伏してしまふまで、それを突立たせておいたならば、それこそ悪戯でもあらうけれど、今のは正直正當な呪文ぢや、彼女の名を借りて徒のロミオを祈り出さうとしたまでぢや。

ベンテ こりや何でも、木の間に隠れて、夜露と濡れの幕といふ洒落であらう。戀は
盲といふから、闇は恰どお誂へぢや。

マアキキ はて、戀が盲なら、的を射中てることは出来まい。今頃はロミオめ、枇杷の
木蔭に蹲踞んで、あゝ子の戀人が、あの娘共が内密で笑ふ此枇杷のやうなら
は何のかのと念じて居よう。おゝ、ロミオ、若し足下の戀人が、おゝ、若し
戀人が、なぞれ、開放しの何とやら、あのこゝな好色漢めが！ ロミオ、さら
ばぢや。野天の床では寒うて寝られぬ、家の床へ往つて臥よう。さ、往か
うか？

ベンテ すれば、去う。見附けられまいと爲てゐるものを捜すのは無要ぢや。

二人とも入る

第二場 同處。 キャピュレット家の庭園。

ロミオ前へ出る。

ロミオ 人の痛手を嘲りをる、自身で創を負うたことの無い奴は……

此時 シュリエット二階の窓に現る。

や、侍てよ！ あの窓から洩るゝ光明は？ あれは東方、すればシュリエット
は太陽ぢや！……あゝ、昇れ、麗しい太陽よ、そして嫉妬深い月を殺せ、彼奴
は腰元の卿の方が一段と美しいを悔しがつて、あの通り蒼ざめて居をる。
あの嫉妬家に奉公するは無用ぢや、彼奴の制服は青白い可嫌な色ぢや、何呆
の外は誰れも着ぬ。脱ぎや〜……ありや姫ぢや。おゝ、戀人ぢや！
あゝ、此情を知らせたいなあ！……何やら言うてぢや、いや、何も言ひはせ

ぬわ。言はいでも大事な、あの目が物を言ふ、あれへ此方も返答せう。……あゝ、ちと厚顔しかつたわい、こりや予に言うてゐるのでは無い。大空中で最も美しい二箇の星が、何か用があつて餘所へ行くによつて、其間代つて光つてくれいと姫の眼に頼んでゐるのぢや。若し眼が星の座に直り星めが姫の頭に宿つたら、何とあらう？ 姫の頬の美しさには星めも羞耻まうぞ、日光の前の燈のやうに。然るに天へ上つた姫の眼は、大空中を隈もなう照らすによつて、鳥どもが晝かと思つて、嘸啼立つることであらう。あれ、頬を掌へもたせてぢや！ おゝ、あの頬に觸れうために、あの手袋になりたいなあ！

ジュリ

あゝ〜！

ロミオ

物を言うたわ。おゝ、今一度物言うて下され、天人どの！ 卿がさうして高い處に光り輝いてゐやしやるのは、驚き異んで、後へ退り、目を白うして仰

いで見る人間共の頭上を、翼の生えた天の使が、徐かに漂ふ雲に騎つて、虚空の中心を渡るやう。

ジュリ

おゝ、ロミオ、ロミオ！ 何故に卿はロミオぢや！ 父御をも嫌ひ、自身の

名をも棄てや。それが否ならば、せめても予の戀人ぢやと誓言しや。予や最早キャピレットを廢めうほどに。

ロミオ

(傍を向きて) もそつと聞かうか、すぐに物を言はうか？

ジュリ

敵は卿の名前ばかりぢや。

モンタギューでなうても卿

は立派ぢや。モンタギュー

が何ぢや？ 手でも、足

でも、腕でも、面でも、何

でも無い、人の身に附い



た物ではない。お、何か他の名前にしや。名が何ぢや？ 薔薇といふ花は、他の名でも、善い香がする、ロミオとてもさうぢや、ロミオとは呼ばいでも、名は棄てても、持前の貴い徳は残らう。……ロミオどの、我有でもない名を棄て、其代りに、此妾を、身も心も、取つて下され。

ロミオ (前へ進みて) お、取りませう、言葉を其儘。一言戀人ぢやと云うて下され、直にも洗禮を受けませう。今日からは最早ロミオで無い。

ジュリ や、誰れぢや、夜の闇に包まれて内密事を聞やつた其方は？

ロミオ 名は何と云うたものか予は知らぬ。なう、我聖者よ、名は敵ぢやと被言るゆゑに、自分ながら憎うてならぬ、紙に書いてあるものなら引破いてのけたい。お前の言葉はまだ百言とは聞かんだが、其聲には記憶がある。ロミオどのでは無いか、モンタギューの？

ロミオ 孰らでもござらぬ、卿が嫌ひぢやと被言るならば。

ジュリ ま、どうして此處へは、さうしてまの何の爲に？ あの石垣は高いゆゑ容易うは攀られぬに、またお前の身分を思へば、若し家の者に見附ければ立地に命が無いのに。

ロミオ さあ、あの石垣は、戀の軽い翼で踰えた。如何な鐵壁も戀を遮ることは出来ぬ。戀は欲すれば如何様な事をも敢てするもの。卿の家の人達とても予を止むる力は有たぬ。

ジュリ でも見附くれば殺さうぞえ。

ロミオ あ、彼等十人二十人の劍よりも、それ、その卿の眼にこそ人を殺す力はあれ。唯もう可愛い目をして下され、彼等に憎まれうと何のそのぢや。

ジュリ 妾や何様な事があつても、お前をば見附けさせたうない。

ロミオ 幸ひと夜の衣を被てゐるゆゑ、見附けらるゝことではない。とはいへ卿に愛せられぬ程ならば、立地に見附けられ、憎まれて殺されたい、卿に愛せら

れいで、死ぬる苦みを延さうより。

ジュリ

誰が案内で此處へはござつたり？

ロミオ

戀が案内ぢや。尋ねて見いと眞先に予に促進めたも戀なれば、智慧を借し

たも戀、目を借したも戀、予は舵取ではないけれども、此様な貨を得うためなら、千里萬里の荒海の其先の濱へでも冒険せうわい。

ジュリ

夜といふ假面を附けたりやこそ、然もなくば恥かしうて此頬が紅のやうに赦うならう、今宵妾の言うたことをついお前が聴かしやつたゆゑに。妾と

ても、體裁つくり、そないなとは言やせぬと言ひたいは山々ぢやが、えゝも、式作法はさらばぢや！ これの、妾が可愛いにか？ 聞かいても「唯」と被

言らうと解つてある、それをまた賢とも思はう、でも誓言をさしやつては心元ない、戀人の誓言破りはジョトウ神も只笑うて済ますといふゆる。おゝ、

ロミオどの、可愛いが實ならば、只ありのまゝに言うて下され。若し餘り

手輕う手に入つたと思はしやるやうなれば、お言寄りやつても、妾は故と怖

い貌して憎さうに否とも言はうぞ、さもなくば世界かけて否とは言はぬ。

眞實に、モンタギューどの、このやうに言うたなら、嘸や蓮葉なども思はしや

らうが、誓文妾は、彼の巧妙に餘所々々しう作りすます人達より今一段眞實

な女子ぢやぞや。妾とても戀の秘密を聴かれなしたら、今一段餘所々々し

うしつらうもの。ぢやによつて、堪忍して、斯う速う靡いたを浮氣ゆるとば

ジュリ

おゝ、月を誓言になお懸けやつそ。廻る夜毎に位置が變つて貞節の無いが

ロミオ

月の姿ぢや、心が月のやうであつてはならぬ。すれば、何を誓語に懸けうぞ？

ジュリ 誓言には及ばぬ、まつこと誓言がしたいなら、妾が爲には神とも思ふお前の身を懸けさつしやれ、すればそれを信せう。

ロミオ 予の真心の眞實に戀ひ慕ふ……

ジュリ はて誓言をおしやんな。嬉しうは思へども、今宵即座の約束は粗忽らしうて無分別で早急で、それといふ間に消えてしまふ稻妻のやうで嬉しうない。戀しいお人、さらばぢや！ 此戀の荅は、皐月の風に育てられて、又逢ふまでに花と咲かう。 さよならく！ お前の胸にも妾の胸にも、嬉しい安息の宿りますやう！

ロミオ すりやこれぎりて別れうでな？

ジュリ ではどうせいと被言るのぢや？

ロミオ 予の誓言と取換に卿の眞實の誓言が聴きたい。

ジュリ さあ、その誓言は、言はれぬ前に献げてしまうた。 今又献げらるゝやうであ

らばよかつたに。

ロミオ では取戻したいと被言らうでな？ 何故ぢや？

ジュリ 手一ぱいにして改めて獻げうために。 とはいへこれも戀なりやこそ、献げたいと思ふ心も海、戀しいと思ふ心も海の、其底は測り知られぬ、献ぐれば献ぐる程、尙戀しさの増すばかりで、どちらにも限は無い。

此時奥にて乳母の聲にて呼ぶ。

奥でかしましい聲がする。 戀しいお方、さらばぢや！……あゝ、乳母、すぐに！……モンタギューどの、必ず渝らず。 待つてゐて下され、やがて又戻つて來う。

ジュリエット入る。

ロミオ おゝ、有難い、かたじけない、何といふ嬉しい夜ぢや！ が、夜ぢやによつて、こりや夢ではないか知らぬ、事實にしては餘り嬉し過ぎて虚らしいわい。

ジュリエット再び階上に現はる。

ジュリ ロミオどの、もう三言ぢや、それで今宵は別れう。これ、お前の心に虚偽がなく、まづこと夫婦にならうとなら、明日才覺して使者をば上げうほどにな、何日何處で式を擧ぐるといふ返辭をして下され、すれば妾の一生の運命をお前の足下に抛出して、世界の如何な端までも殿御のお前に随いてゆかう。

乳母 (奥にて) 姫さま!

ジュリ あい、今すぐに。……したが、萬一にも正しうない心を有つてござらば、どうぞ……

乳母 (奥にて) 姫さま!

ジュリ 今すぐに行くわいの。……縁談を斷然止め、子を勝手に泣かして下され。明日使を送けうぞ。
ロミオ 後の生をも誓語にかけて……

ジュリ 千たびも萬たびも御機嫌よう!

ジュリエット入る。

ロミオ 千たびも萬たびも予は機嫌がわるうなつたわ、卿といふ光明が消えたによつて。戀人に逢ふ嬉しさは、寺子共が書に離るゝ心持と同じぢやが、別るゝ時の切なさは溢面つくる寺屋通ひぢや。

ロミオ そろゝと退る。

ジュリエット 又階上に現れて笛と口笛を鳴らす。

ロミオ! 千たびも萬たびも予は機嫌がわるうなつたわ、卿といふ光明が消えたによつて。戀人に逢ふ嬉しさは、寺子共が書に離るゝ心持と同じぢやが、別るゝ時の切なさは溢面つくる寺屋通ひぢや。

ロミオ や、予の名を呼ぶは戀人ぢや。あゝ、戀人の夜の聲言は白銀の鈴のやうにや

さうして、聞けば聞くほどなつかしいわい！

ジュリ ロミオ！

ロミオ 恋人か？

ジュリ 明日何時頃に使を送げうぞ？

ロミオ 九時に。

ジュリ あい、ちがへはせぬ。あゝ、それまでが二十年ぢや。ま忘れた、何でお前を呼返いたやら。

ロミオ 思ひ出しやるまで、斯うして此處に立つてゐよう。

ジュリ さうしてゐて欲しいによつて、妾や尙と忘れう、一しよにゐたさばかり忘れいで。

ロミオ そして予はいつまでも斯うして此處に立つてゐよう、卿にも忘れさせ、自身にも此家の外を皆忘れて。

ジュリ

もう夜が明くる。往んで欲しいとは思ひながら、小鳥の脚に氣儘少女が、囚人の鎖のやうに絲を附けて、ちよと手放いては引戻し、又飛ばいては引戻すと同じやうに、お前をば往なしたうもあり、惜しうもある。

ロミオ

卿の小鳥になりたいなあ！

ジュリ

お前を小鳥にしたいなあ！ したが餘り可愛がつてつい殺いてはならぬによつて、もうこれでおさらばぢや！ さよなら！ あゝ、別れといふものは悲し懐しいものぢや。夜が明くるまで、斯うしてさよならを言うてゐたい。

ジュリエット 入る。

ロミオ

あゝはれ、卿の目には安眠が、卿の胸には安心の宿るやう！ あゝ、其安眠とも安心ともなつて君の美しい胸や目に宿りたいなあ！……これから上人の庵へ往て、今宵の仕合せを話いた上、何かと助力を求めうわい。

ロミオ 入る。

第三場 同處。フライヤー僧ローレンス法師の庵室。

ローレンス法師提籃を携へて出て来る。

ローレ 灰色目の旦が鬚縮面の夜に對うて笑めば、光明の縞が東方の雲を彩り、剝げかゝる暗は、日の神の火の輪の前に、さながら醉人のやうに蹣跚く。どりや太陽が其燃ゆるやうな眼を舉げて今日の晝を慰め、昨夜の濕氣を乾す前に、毒ある草や貴い液を出す花どもを摘んで、吾等の此籃を一杯にせねばならぬ。萬有の母たる大地は其墓所でもあり、又其埋葬地たるものが其子宮でもある、さて其子宮より千差萬別の兒供が生れ、其胸をまさぐりて乳を吸ふやうに、更に何か一種宛靈妙じい殊なる效能のある千種萬種を吸出だす。

あゝ、夥しいは草や木や金石どもの其本質に籠れる奇特ぢや。地上に存する物たる限り、如何な悪い品も何等かの益を供せざるは無く、又如何な善いものも用法正しからざれば其性に悖り、圖らざる弊を生ずる習ひ。美德も法を誤れば悪徳と化し、悪徳も用處を得て威嚴を生ず。此孱弱い幼稚い莠の裡に毒も宿れば薬力もある、嗅いでは身骨中を慰むれども、嘗むるときは心臓と共に五官を殺す。かゝる敵同志が植物界にも人間界にも常に陣どつて相闘ふ……仁心と害心とが……而して悪い方が勝つときは、忽ち毒蟲に取附かれて其植物は枯果つる。

ロミオ出て来る。

ロミオ お早うござります。

ローレ 冥加あらせたまへ！ 誰れぢや、此早朝に、なつかしい其聲音は？ ほう、若い癖に早起は、心に煩悶のある證據ぢや。老の目は苦勞に覺め勝ち、苦勞

の宿る處には兎角睡眠の宿らぬものぢやが、心に創が無く腦に蟠りのない
若い者は、手足を横にするや否や、好い心持に眠らるゝ筈ぢやに、かう早う
起きさしやつたは、こりや何か煩悶が無うてはならぬ。さうでなくば、こち
のロミオは、昨夜は床に就かなんだのぢやな。

ロミオ 其通りでござる、眠なんだ故にこそ嬉しい安心。

ローレ 神よ、罪を赦させられい！ さてはロザリンと一しよぢやな？

ロミオ ロザリンと一しよぢやと被言るか？ 其名前も其名前に伴ふ悲痛も予や最

早みんな忘れてしまつた。

ローレ それでこそ好い子ぢや。さすれば何處におしやつたのぢや？

ロミオ 二度と問はしやらいでも話さう。仇敵の家で酒宴の最中、だまし撃に予に

創を負はいた者があつたを、此方からも手を負はいた。二人の受けた創は
貴僧の薬力を借れば治る。なう上人、予は其敵を憎みはせぬ、かうして頼

みに來たのも互ひの身の爲を思ふからぢや。

ローレ はて、明白と、素直に被言れ。懺悔が謎々のやうであれば、赦免も謎のやう

なことにならう。

ロミオ されば明白と言はうが、予はキャピュレット家のあの美しい娘をば又と無い戀

人と定めてしまつた。予が定めたりや先方もまた其通りに定めてゐやる。
手筈は皆濟んだ、残るは貴僧に濟まいて貰ふ神聖な式ばかりぢや。何時、

何處で、如何して逢うて、如何言寄つて、如何な誓言をしたかは、歩きながら
話すほどに、先づ承引して下され、今日婚禮をすることを。

ローレ 南無フランシス上人！ これはまた何たる變りやうぢや！ あれほどに戀

ひ焦れておじやつたロザリンを最早棄て、おしまやつたか？ されば若い
手合の戀は其心には宿らいで其眼中に宿ると見えた。 Jesu Maria! どれ

ほど苦い水が其蒼白い頬をロザリンの爲に洗つたことやら！ 幾何の鹽辛

水を無用にしたことやら、今は餘波さへもない其戀を味つけうために！
 卿の溜息はまだ大空に湯氣と立昇り、卿の先頃の呻吟聲はまだ此老の耳に
 鳴つてゐる。それまだ其頬に古い涙の汚れが拭はれいで、残つてある。卿
 はやはり卿で、あの愁歎は卿の歎愁であつたなら、それは皆ロザリンの爲で
 あつたに、なりや其心が變つたか？ すれば此一語を唱へしめ、……女は心
 の移る筈、男心さへも堅固にあらず。

ロミオ 貴僧はロザリンに戀すなというて幾たびもお叱りやつた。

ローレ 戀すなではない、溺るなと言つたのぢや。

ロミオ そして戀を葬れいと被言つた。

ローレ 前のを墓に葬つて別のを掘出せいとは言はぬわ。

ロミオ なう、叱つて下さるな。此度の女は、此方で思へば彼方でも思ひ、此方で慕へば彼方でも慕ふ。以前のはさうで無かつた。

ローレ お、それは、卿の戀を、能う會得してもぬことを只口頭で誦む類とお見
 抜きやつてゐた爲でもあらう。したが、こゝな浮氣者、ま子と一しよに來
 やれ、仔細あつて助力せう、此縁組が原で兩家の確執を和睦に變へまいも
 のでもない。

ロミオ お、速う。早急に濟まさきにやならぬ。

ローレ いや、賢う徐うぢや。馳出す者は蹉躓くわい。

ローレンス 先に、ロミオ従いて入る。

第四場 同處。街上。

ペンドリオとマアキエシオと出て來る。

マアキユ ロミオめは何處へ往きをつたか？ 歸らなんだか昨夜は？

ベンヂ うん、父者の家へは。家來に逢うて聞いた。

マアキユ はて、あの蒼白い情無し女のロザリンめが散々に奴を苦めるによつて、果は狂人にもなりかねまいわい。

ベンヂ キヤビュレットが一族のチツバルトが、ロミオが父者へ宛て、書面をば送つたさうな。

マアキユ 誓文、決闘状であらう。

ベンヂ ロミオは返答せう。

マアキユ 字の書ける程の者なら、返答をせいでか。

ベンヂ いや、しかけられたからは、立合はうと返答せう。

マアキユ あゝ、ロミオの奴め、奴は最早死んでゐるわい！ あの眞白な小婦の黒い目でしてやられた、耳は戀歌で射貫される、心臓の眞中央は例の盲小僧の彼の

稽古矢で打碎かれる。何してあのチツバルトと立合ふことが出來うぞい！

ベンヂ え、如何な男ぢやチツバルトは？

マアキユ 昔話の猫王ぢやと思つたら當が違はう。見事武士道の式作法に精通遊ば

いたお達人さまぢや。譜本で歌を唱ふやうに、時も距離も釣合も違へず、

一、二と間を置いて、三つと言ふ途端に敵手の胸元へ貫通、絹鈕をも芋刺にし
ようといふ決闘師ぢや、例の第一條、第二條を口癖にする決闘師の嫡々ぢや。
あゝ、百發百中の進み突とござい！ 次は逆突！ 參つた突とござる！

ベンヂ え、何突？

マアキユ 白癩、あのやうな變妙來な、異様に氣取つた口吻をしをる奴は斃りをれ、陳

奮漢め！ 「イエスも照覽あれ、拔群な劍士でござる！ いや、拔群な丈夫で
ござる！」 へん、拔群な淫婦でござるが聞いて呆れるわい。何と、お祖父さま、
情無い世の中となつたではござらぬか、朝から晩まで流行を仕入廻つて、

口さへ開けば *pardonnez-mois, pardonnez-mois!* 新型の細袴を穿かねば半時、片時も立つてをられぬ如是盡共に惱されねばならぬとは？ お、又しても *bon! bon!* ぶんく！

ロミオ 出で来る。

ベンゾ ロミオが來せた、ロミオが。

マアキ 鯛を抜かれた鯉の干物といふ面附ぢや。お、にいは、にいは、てもまあ憫然しい魚類とはなられたな！ こりや最早ペトラルカが得意の戀歌をお手の物ともござらう。ローラなどはロミオが愛姫に比べては山出しの下婢ぢや、もつとも歌ほどはローラが遙かに上等のを作つて貰うた。はて、ダイドーは自墮落女で、クレオパトラは赤面の乞食女、ヘレンやヒーローは賈女、賤女で、シスビは碧瞳ぢや何のかのと中せども、所詮は取るに足らぬ……なうく、ロミオの君、えへん、*bon jour!* これは佛蘭西式の細袴に對しての

佛蘭西式の御挨拶でござる。昨夜はようも巧々と賈金を掴ませやつたの。

ロミオ お二人ともお早うござる。なに、賈金とは？

マアキ 吾々の目をお抜きやつて。後は言はいでもぢや。

ロミオ マアキ シオどの、恕いて下され、實は是非もない所用がおりやつたからぢや。あのやうな際には、つい禮を曲ぐることがござる。

マアキ ふん、あのやうな際には、足腰の曲げ方が異ふといふのぢやな？

ロミオ と被言は、慇懃にするためといふ意か？

マアキ 其通り、御深切な解釋ぢや。

ロミオ これはまた御丁寧なお言葉ぢや。

マアキ 其筈ぢや、乃公は禮法にかけては精華とも崇められたものぢや。

ロミオ 精華とは名譽の異名か？

マアキ いかにも。

ロミオ はて、然らば、予の舞踏靴は此通り孔だらけぢやによつて名譽のものぢや。
マアキユ 出来たわ。 さあ、此上は洒落競べぢや。 これ、足下の其薄つべらな靴の底

は、今に悉く磨り減つて、果は見苦しい赤い足を出しやらうぞよ。

ロミオ はて、見ぐるしい赤い恥を駄洒落るとは足下のことぢや。 それ、薄つべら
な智慧の底が最早見えたるわ！

マアキユ おい、應援してくりや、ベンゾリオ。 智慧の息が切るゝわ。

ロミオ 鞭を加てや、鞭を、もそつとく。 さうで無いと「勝つた」と呼ぶぞよ。

マアキユ いや、こんな阿呆らしい拔駟の競争は最早中止ぢや。 何故と被言れ、足下
は最初からぬけてゐるわ。 何と、頭抜けた洒落であらう。

ロミオ 成程、愚鈍者事にかけては、足下は生得頭抜けてゐる。

マアキユ 巧く脱けをつたな、咬むぞよ。

ロミオ はて「咬んでたもるな、阿呆鳥どのよ」ぢや。

マアキユ 足下の洒落は橙々酢といふ格ぢや、薬味に使うたら酸ばからう。

ロミオ ぢやによつて、かうした味の脱けた代物に撒布けてゐるのぢや。

マアキユ おゝ、ても善う廻るわ、寸から尺に伸びる莫大小口とは足下の口ぢや。

ロミオ はて、伸びると言へば、その伸びるとは足下の鼻の下ぢや、今天下に並びも
ない拔作どのは足下のことぢや。

マアキユ (笑つて) 何と、かう洒落れのめいてゐるはうが、惚れたの、腫れたのと呻吟い
てゐるよりは優であらうが？ 今日こそは、つゝともう人好のする立派な

ロミオ ぢや、今日こそは正面、側面、何處から見ても正めん賈無しのロミオ
ぢや。 女の事で愁言言ふは、例へば彼の侏儒めが、見ともない面をして、例

の棒切をおつたてゝ……

ベンゾ もう止めた、もう止めた。

マアキユ しかけた話を止めいと如何ぢや？

ベンゾ 黙つてゐたら何を言ひ出しやらうも知れぬ。

マアキユ 大ちがひぢや、何をしようぞい。事はとうに終んだわ。もう何もする氣は無い。

ロミオ こりや面白いわ！

乳母 先に、下人ピーター大きな扇子を持ちて従いて出て来る。

マアキユ 船ぢや〜！

ベンゾ 二艘々々。男繻絆と女繻絆ぢや。

乳母 ピーターア！

ピーター 只今！

乳母 子の扇子を。

マアキユ ピーターアどんや、扇子で面を隠さつしやらうと言ふのぢや、如何さま、扇子の方が標致が佳いわい。

乳母 殿方、お早うござります。

マアキユ 御婦人、お晩うござります。

乳母 え、晩うござりますとえ？

マアキユ いかにも。それ、その日時計の淫亂な手が午過の標に達してゐるわさ。

乳母 はれま、此人は！ 何たるお人ぢやお前は？

ロミオ 御婦人、これは事壊しの爲に神様が造らせられた男ぢや。

乳母 ほんに、巧いことを被言る。事壊しの爲に出来た人ぢやといの！ あの殿

方え、ロミオの若様には何處へゐたら逢はれうか、御存じなら教へて下され。

ロミオ 予が教へう。したが其若様は貴女が彌々逢はしやる時分には尋ねさしやる

今よりは老けてゐようぞよ。はて、予が最年少のロミオぢや、さしあたり

此品より粗いのはござらぬ。

乳母 ても巧いことを被言る。

マアキユ 何ぢや、最粗いのをば甘美い？ はて、巧い意味の取りやうちや。賢女々々。
 乳母 貴下がロミオさまなら、何處ぞで改めて御密會（御面會）が願ひたうござりま
 す。

ベンゾ （笑つて）今に優待といふ積りで誘惑をはじめかねまい。

マアキユ 慶庵婆だ〜！ 来た〜！

ロミオ 来たとは何が？

マアキユ はて、兎ではござらぬ、假令兎にしても脂肪の満つた奴ではなうて、節肉祭
 式の肉饅頭、食はぬうちから陳びて萎びて……

（歌ふ）。やんれ、徴の生えた雌兎、

やんれ、徴の生えた雌兎、

レント祭には相應なれど

徴びた兎ちや二十人にも食へぬ、

食はぬうちから徴びたと聞けば……

ロミオ、父御の館へおじやれ。あそこ
 で飲まうぞ。

ロミオ 後から行かう。

マアキユ お嬢どの、さらばぢや。さらば〜。

姫さん〜……

流行の小唄を唱ひながら
 ベンゾリオと共にマアキユシオ
 入る。

乳母 はい、御機嫌よう……もし〜、あの人
 は、ま、何といふ無作法な若い衆でござ
 るぞ？ あくたいもくたいばかり言



うて。

ロミオ あれは饒舌ることの好きな仁ぢや、一月かゝつて聴く分量よりも一分間に自分が饒舌る方がすつと多い。

乳母 おのれ、予の事を何とでも言うて見をれ、目に物を見せうぞい。よしんば見かけより強からうと、あのやうな奴めが、別に二十人もあらうと、大事ない。自力で敵はぬなら、人をば頼むわいの。碌でなしの和郎め！ 彼奴らに阿呆にされて堪るものかいの。彼奴らの無頼仲間ぢやありやせぬわい。……（下人に對ひて）汝も傍に立つてゐながら、予が隨意的にされてゐるのを見てゐるとは何の事ぢやい。

ピータ 誰れもお前を隨意的には爲やせぬがや。若しも其様なことがあれば、此利劍を引抜かいでかいの。こりや抜かんければならん場合ぢやとさへ思や、餘所の人に負くるこつちぢやない。

乳母

えゝ、ほんにく、悔しうてく、身體中が顫へるわいの。碌でなしの和郎めが！……（ロミオに對ひて）もしく貴下さまえ、最前も申しましたが、妾の姫さまが、貴下を捜いて來いと吩咐でな、其仔細は後にして、先づ言うて置くことがござります、若しも貴下が、世間で言ふやうに、阿呆の極樂へ姫さまを伴れて行かしやるやうならば、ほんにく、世間で言ふ通り、不埒な事ぢや。何故と被言りませ、姫さまはまだ齡がゆかしやらぬによつて、騙さつしやるやうであれば、ほんにそれは悪いこつちや、御婦人を騙さつしやるは卑怯ぢや、非道ぢや。

ロミオ

お乳母どの、おぬしのお姫どのへ慰懃に傳へて下され。予は飽迄も言うておく……

乳母

はれ、善いお仁や、ほんに其通り申しましたよわいな。ほんにま、何様に喜ばしやらう。

ロミオ 何を其通りに言ふのぢや？ まだ何も言やせぬ。

乳母 飽迄も言うて置くと言はしやれたと申しましょ、それが立派なお言傳手ぢやがな。

ロミオ これ、姫に勸めて……な、此晝過に、何とか才覺のして、懺悔式にござれと被言れ。 ローレンス殿の庵室で、式をば濟いて婚禮せう。 これは骨折賃ぢや。

乳母 いえ、めつさうな。 一錢も戴きませぬ。

ロミオ まゝ。 是非とも。

乳母 では、此晝過に？ む、む、其様にいたしましょ。

乳母 行きかゝる。

ロミオ これの、ま、お待ちやれ。 やがて寺の扉外まで、おぬしに渡す爲に家來に繩梯子のやうに編み合いたものを持っていて遣らう。 その綱が忍ぶ夜半に嬉し

ロミオ 御機嫌よういらせられませい！……あ、もしく。

ロミオ 何とか被言つたか？

乳母 御家來は口の堅いお人かいな？ 二人ぎりの秘密は洩れぬ、三人目が居ら

ねばと言ひますぞや。

ロミオ 大丈夫ぢや、綱鐵のやうに堅い男ぢや。

乳母 それならば。 こちの姫さまはな、それはく、憐しうて……ほんにく、まだ幼うて分別もないことを言うて、あつた時分は……お、あのな、パリス様と言うてお立派な方がな、どうぞして物せうと氣を揉まつしやるのぢやが、あのよな人に逢ふよりは子や蟾蜍に逢うたほうが優ぢやと言うて、あの蟾蜍に。 予も折々は腹を立つても見ますのぢや、パリスどの、方が、すつと

好い男ぢやと云うてな。すると眞の事ぢや、嬢は眞蒼な顔にならつしやる、
圖無い白布のやうに。え、ロミオと萬迭香とは頭字が同じかいな？

ロミオ

いかにも。それが何としたぞ？ 兩方ともRぢや。

乳母

はれま、人を！ そりや、犬の名ぢやがな。Rがお前の……いや、何か
他の字に相違ないわいの。……何でもな貴下と萬迭香とが如何とやらした
といふ、何ぢや知らんが、面白さうな額言とやらを作らしやつてぢや、貴下
が聞かしやれば喜ばしやらうやうな。

ロミオ

姫に宜しう言うて下され。

ロミオ入る。

乳母

はい、申しましたよとも……ピーター！

ピーター

只今！

乳母

先へ、そして急歩的と。

乳母とピーターと入る。

第五場 同處。 キャピュレットの庭園。

ジュリエット出で来る。

ジュリ

乳母が出て行きやつた時、時計は九つを打つてゐた。半時間で歸ると約束
しやつたに。逢へなんだか知らぬまでい。いや、さうでは無い。え
ゝも、乳母めは跛足ぢや！ 戀の使者には思念をこそぢや、思念は残んの夜
の影を遠山蔭に追走らする旭光の速さよりも十倍も速いといの。それぢ
やによつて戀の神の御輦をば翼輕の鳩が牽き、風程に速いキュービッドは双
つの翼を有つてゐるのぢや。太陽は最早今日の旅の峠までも達いたのに、

九時から十二時まで、は長い〜三時間ぢやに、まだ歸つては來やらぬ。
乳母に情が燃えてゐたら、若い温かい血があつたら、テンニスの球のやうに、
予が吩咐くる言葉の下に戀人の許へ飛んで行き、また戀人の返辭と共に予
の手元へ飛返らうもの。……あゝ、老人といふものは、兎角死んでゐる
かのやう、太儀さうに緩漫と、重くるしう蒼白う鉛のやうに……

乳母 ビーターアを従つて出て來る。

おゝ、嬉しや、歸つて來やつた。……なう、乳母いの、如何ぞいの？ あの方
に逢やつたかいの？……侶の男は彼方へ。

乳母 ビーターア。……門口に控へてゐや。

ビーターア 入る。

ジュリ さ、乳母いの。……ま、何で其様な情ない顔してゐやる？ 悲しい消息であ
らうとも、せめて嬉しさうに言うていの。 若しまた嬉しい消息なら、それ

を其様な顔持してお弾きやるは、折角の床しい琴の音楽を臺無しにしてし
まふのぢや。

乳母 おゝ、辛度や。 暫時まあ休まいて下され。 あゝ〜骨々が痛うて〜！

ま、どの位ほつとまはつたことやら！

ジュリ 予の骨々を其方に與つても、速う其消息が此方へ欲しい。 なう、これ、どう
ぞ聞かいてたも。 なう、乳母や、乳母いのう、如何ぢやぞいの？

乳母 ま、氣忙しい！ 暫時の間が待てぬかいな？ 息が切れて物が言はれぬで
はないかいな？

ジュリ 息が切れて言はれぬと被言る程なら、息は切れてゐぬ筈ぢや。 何のかのと
言譯してゐやるのが肝腎の一言より長いわいの。 これ、吉か凶か？ 速う
言や。 それさへ言うてたもつたら、詳細事は待つてもゐよう。 速う安心
さしてたも、吉か凶か？

乳母 はて、お前は阿呆らしいお人ぢや、あのやうな男を選ばしやるとは目が無いのぢや。ロミオ！ ありや不可んわいの。面附こそは誰れよりも見よけれ、脛附が十人並以上ぢや、それから手や足や胴やは彼此言ふが程も無いが、外には、さ、類が無い。行儀作法の生粹ぢやありやせん、でも、眞の事、羊兒のやうに溫和しい人ぢや。さあ〜、小女よ、信心さつしやれ。……え、もう終しやつたか晝の食事を？

ジユリ いえ〜、其様な事ならば、予が夙に知つてをる。これ、婚禮の事をば何と言うてぢや？ それを。

乳母 はれ、頭痛がする！ あ、何といふ頭痛であらう！ 頭が粉壘に碎けて今にも落ちさうに疼くわいの。脊中ぢや。……そつち〜。……お、脊中が、脊中が！ ほんに出嬢が怨めしいわいの、遠い〜處へ太儀な使者に出さしやつて如是な死ぬるやうな思ひをさすとは！

ジユリ ほんに氣の毒ぢや、氣分が悪うてはなあ。したが乳母、乳母や、乳母いなう、

何卒言うてたも、戀人が何と被言つた？

乳母 さいな、あの方の言はしやるには、行儀もよければ深切でもあり、男振はよし、器量人でもあり、流石に身分のある殿方らしう……お母さまは何處にぢや？

ジユリ 母さまは何處にぢや？ 母様は家にぢや。何處へ行かしやらうぞ？ 何を言やるぞい！「あの方が被言るには、身分のある殿方らしう、お母様は何處にぢや？」

乳母 はれまあ！ そのやうに熱くならしやるな。これさ、まあ、ほんに〜。それが痛む節々の塗薬になりますかいの？ これからは自身で使ひ歩きをばさつしやつたがよい。

ジユリ まあ、仰山な騒ぎぢや！……これの、ロミオが何と被言つた？

乳母 お前今日お参詣に往ても可いといふお許可が出ましたかえ？

ジュリ あいの。

乳母

すればなう、急いでローレンス様の庵室まで往かつしやれ。あそこでお前を内室になさるゝ人が待つてぢや。そりやこそ頬邊へ放埒な血めが上るわ、所詮は何を聞いても直に眞赤にならしやらうぢやまで。速うお寺へ。

予はまた別の方へ往て梯子を取つて來ねばならぬ、其梯子でお前の戀人が、今宵暗うなるが最後、鳥の巢へ登らしやるのぢや。予は只もう齧齧とお前を喜ばさうと念うて。したが、やがて夜になると、お前も骨が折れうぞや。

さ、予は食事をせう。貴嬢は庵室へ速うゆかしやれ。

ジュリ

速う其幸福に！……乳母や、きげんよう。

二人とも入る。

第六場 同處。ローレンス法師の庵室。

ローレンス法師先に、ロミオ從いて出で來る。

ローレ

諸天善神、願はくば此神聖なる式に笑ませられませい、ゆめ後日悲哀の降さしまして御譴責のあらせらるゝな。

ロミオ

アーメン、アーメン！ とはいへ、如何様な悲哀が來ようとも、姫の顔を見る嬉しさの其刹那に易られうか？ 神聖い語で二人の手を結び合はいて下されば、戀を殺す死の爲に身は如何様にならうとまゝぢや、妻と呼ぶことさへ叶へば心残りはござらぬ。

ローレ

さやうな過激の歡樂は、兎角過激の終を遂ぐる、火と煙硝とが抱合へば忽ち爆發するがやうに、勝誇れる最中にも滅びてしまふ。上なう甘い蜂蜜は旨

過ぎて厭らしく、食うて見よう氣も鈍る。ちやによつて戀も程よう。程よい戀は長う續く、速きに過ぐるは猶遲きに過ぐるが如し。

ジュリエット出で来る。

それ、姫が來せた。お、あのやうな軽い足では、いつまで踏まうとも、堅い石道は磨るまいわい。戀の奴は、あの埒もない夏の風に戯れ遊ぶ絲遊に騎らうとも、落ちはずまい。それほどに軽い空な歡樂！

ジュリ

(ローレンスを抱きて)ごきげんようござらしませい。

ローレ

其返禮は、ロミオの口から二人分被言らうぞ。

ジュリ

(ロミオを抱きて)なりやロミオにも改めて、さうせねば返禮が過よう。

ロミオ

あ、ジュリエット、今日を嬉しい、かたじけないと思ふ心が予と同じやうに満腔なら、しかもそれを現す力が予よりも多いなら、今日の出會で二人が感ずる此限り無いかたじけなさを、床しい天樂のやうな卿の聲で、四邊の空

ジュリ

氣も融解くるやうに、なつかしらしう奏で、下され。

内實の十分な思想は、言葉の花で飾るには及ばぬ。算へらるゝ身代は貧しいのちや。妾の戀は、分量が大さうく、なつたゆるるに、今は其半分も計算することが出來ぬわいの。

ローレ

さ、予と一しよにおじやれ。速う濟いてのけう。こりや、慮外ながら、尊い教會が二人を一人に合體さするまでは、さし對ひでゐてはなりませぬのちや。

ローレンスに従いて二人とも入る。



第三幕

第一場 エローナ。街上。

マアキユシオ 先に、ベンゾリオ、侍童下人等従いて出て来る。

ベンテ マアキユシオどの、もう歸らう。暑くはある、キャビュレット家の奴等が出歩いててもをる、出會したが最後、鬭争をせねばなるまい。かういふ暑い日には、えて氣ちがひめいた血が騒ぐものぢや。

マアキユ これ、酒亭へ入つた當座には、劍を食卓の下へ叩きつけて「神よ願はくば汝

に必要あらしめたまふな」といふ口の下から、二杯目の酒が利いて、何の必要も無いに、給仕人を敵手に引つこぬく手合があるが、足下が其仲間ぢや。予がそんな仲間か？

マアキユ さう、足下は伊太利で誰れにも負を取らぬ易怒男ぢや、直に怒るやうに仕向けられる、仕向けられるれば直怒る。

ベンテ して何を爲うでの？

マアキユ いや、足下のやうなのが二人とゐたら、忽ち殺しあうてしまはうすによつて、二人ともゐなくならうわい。はて、足下などは髭の毛一筋の多い少ないが原でも叩き合ふ。或は榛の實を嚙割つたらうと言つて鬭争を買ひかねぬ、自己の目の色が榛色ぢやといふだけの事で。その眼でなうて然ういふ鬭争を買ふ眼が何處にあらう？ 足下の頭には鶏卵に黄蛋が充實つてゐるやうに、鬭争が充満ぢや、しかも度々打撲されたので少許腐爛氣味ぢやわい。

足下は、街中で咳をして足下の飼犬の日向ぼこりを驚かいたと言うて、或男と鬭争をした。復活祭前に新調胴衣を着たと言うて或裁縫師と掴み合ひ、新しい靴に古い紐を付けをつたと言うて誰某とも争論み合つた。それで

ベンヂ

予が足下ほど鬭争をすまいぞと異見めいたことを被言る？
もよいが。

マアキユ

ろはちや！ おゝ、ろつはつは！ (と笑ふ)

チツバルトを先に、キャビユレットの黨人出で来る。

ベンヂ

や、キャビユレットどもが來をつた。

マアキユ

へん、かまふものかえ。

チツバ

予に附着いて來う、彼奴等と談じてこまそ。……(ベンヂリオ等に)諸氏機嫌よう。一言申したうござる。

マアキユ

たんだ一言でござるか？ 何か添へさしめ。一言兼一撃としたらば何とちや？

チツバ

機會さへ與しやらば、何時でも敵手になり申さう。

マアキユ

此方から與さねば、其方では機會が出來ぬと被言るか？

チツバ

マアキユシオ、足下は平生あのロミオと調子を合いて……

マアキユ

何ちや、調子を合いて？ 予等を樂人扱ひに爲ようでな？ よいわ、樂人扱

ひに爲るとならば、見事耳の中を顛覆さする音樂を聞す程に準備せい。(劍に手を掛けて)乃公の胡弓は此劍ちや、今に足下を踊らせて見せう。畜生、調子を合す！

ベンヂ

こゝは往來ちや、どうぞ閑寂な處で冷靜に談判をするか、さもなくば別れた

がよい。衆人が見るわ。

マアキユ

見る爲の眼ちや、見るがえいわ。 他が如何思はうと介意ふものかえ。

ロミオ 出で来る。

チツバ 足下とは中直りぢや。あそこへ奴が來をつた。

マアキユ 奴ぢや？へん、ロミオが足下の奴なものか、何時足下が給服を着せた？

はて、先に立つて決闘場へ行きやれ、ロミオも隨行をせう。それが奴の役ならロミオは足下様のお抱奴ぢや。

チツバ (ロミオに對ひて) やい、ロミオ、足下に對する予が情合からは是限りか言へぬ。
……汝は惡漢ぢや。

ロミオ チツバルト、足下を愛する仔細があつて、怒らねばならぬ其挨拶をもわるうは取らぬ。予は惡漢ではない。さらば。足下は予を知らぬのぢや。

ロミオ 行きかぐる。

チツバ 小僧め、それが無禮の辨解にはならぬぞ。ぢやによつて戻つて抜劍け。

ロミオ 予は無禮をした覚えはない、いや、其仔細の分るまでは逆も會得のゆかぬ程

に予は足下を愛してゐるのぢや、ぢやによつてキャビュレットどの、予は今キャビュレットといふ其名前を我名も同様に大切に思つてゐる、まゝ堪忍さつしやれ。

マアキユ おゝ、柔弱い、不面目な、卑劣な降參！ 此上は劍あるのみぢや。(劍を抜く)

チツバルト、いやさ、猫王どの、お往きやらうか？

チツバ 何ぞ予に用があるか？

マアキユ 猫王どの、九箇あるといふ足下の命が只一つだけ所望したいが、其後の舉動次第で残る八箇も叩き挫くまいものでもない。耳形の欄を掴んで其劍を

お抜きやれ、速うせぬと乃公の劍が足下の耳元へお見舞ひ申すぞ。

チツバ 合點だ。

劍を抜く。

ロミオ マアキユシオどの、まあ〜劍を。

マアキユ さ、突くぞよ。

チツバルトとマアキユシオと闘ふ。

ロミオ 抜劍け、ベンゾリオ、二人の武器を叩き落しや。これさく、恥ぢやく、
亂暴をすな？ チツバルト、マアキユシオ、領主の嚴命では無いか、ドローナ
の街頭で鬭諍をしてはならぬ等ぢや。これさ、チツバルト！ マアキユシオ！

此立廻りの間にマアキユシオはチツバルトに突かる。チツバルト及び其黨人入る。

マアキユ やられた！ 畜生、兩方の奴等め！ やられたわい。去にをつたか、彼奴め
無創で？

ベンゾ や、手を負うたか足下は？

マアキユ 唯、唯、引搔かれたく。はて、これで十分ぢや。侍童めは何處にをる？
小奴、速く往て下科醫者を呼んで來い。

ロミオ これ、氣を確に。手傷は決して重うないわ。

マアキユ さうぢや、井戸ほどに深くも無ければ、教會の入口程には廣くもない、が十分
ぢや、役には立つ。明日訪ねておくりやれ、すれば墓の中から御挨拶ぢや。
先づ乃公の一生も、誓文、總仕舞が澄んでしまふた。……畜生、兩方の奴等

め！……うぬ！ 犬鼠、驢鼠、猫股、人間を引搔殺しやがる！ 一二三で劍
を使ふ駄法螺吹家め！ 破落戸、惡黨！ 何で真中へ飛込んだんぢや足下
は！ 足下の腕の下でやられた。

ロミオ みんな爲を思つてしたのぢや。

マアキユ おい、ベンゾリオ、何處ぞ家の中へ伴れて行つてくれ、速うせぬと氣絶し
さうぢや。畜生、兩方の奴等！ とうとう子を蛆蟲の餌食にしてしまひをつ
た。參つた、しつかり參つた。畜生、兩方の奴等！

ベンゾリオに介抱せられて、マアキユシオ入る。

ロミオ 領主には近親たる信友のマアキュシオが、予故あのやうな重傷を負ひ、予はまた只一時程縁者となつたあのチツバルト故に汚名を受けた。お、ジュリエット 卿の艶麗さが予を柔弱にならいて、日頃鍛うておいた勇氣の鋒も鈍つたわい。

ベンゾリオ 又出で来る。

ベンゾリオ お、ロミオ、マアキュシオはお死にやつたぞよ！ あの勇敢な魂は雲の上昇つてしまつた、氣短に此世を厭うて。
ロミオ けふの此悪運は此儘では濟むまい。これは只不幸の手始、結局は將來がせねばならぬ。

チツバルト 又出で来る。

ベンゾリオ 我武者のチツバルトめが又來をつた。

ロミオ なに、無事で勝誇つて？ マアキュシオを殺されたに！ 此上は禮儀も寛大

も天外に抛つた、火を眼の忿怒神よ、案内者となつてくれい！……ハチツバルトに對ひ、やい、チツバルト、先刻足下が予にくれた「悪漢」の名は今返す、受取れ。マアキュシオの魂がつい頭上に立迷うて同伴者を求めてゐる、足下か予か、兩人ながらか、同伴をせねばならぬぞ。青二才どの、最初同伴つて來た足下ぢや、冥土へ行くも一しよにお往きやれ。
ロミオ それは此劍が決めるわ。



二人闘ふ。チツバルト倒る。

ベンデ ロミオ、速う！ 速う逃げた！ あれ、市人が騒ぎはじむる。チツバルトは落命ぢや。狼狽へてゐるところでない。捕へられたならば領主は死罪を宣告せう。速う落ちた、速う〜！

ロミオ お、予や運命の玩弄物ぢやわい！

ベンデ これ、何をしてござるのぢや。

ロミオ 入る。

市人等 出で来る。

甲市人 マアキュシオを殺いた奴は何方へ逃げました？ 人殺しのチツバルトは何方へ逃げました？

ベンデ そこにゐるのがチツバルトでござる。

甲市人 ござれ、吾等と一しよに。御領主の命でござる、ござれ。

此時領主公爵多勢の従者を引連れて出で来る。モンタギュー長者夫婦、キャピユレット長者夫婦、其他多勢出で来る。

領主 その不埒な争闘を始めた者共は何方にをる？

ベンデ 憚りながら、此不運なる騷擾のあさましき経緯は小臣言上のいたしませう。

それに倒れをりまする男が御親戚のマアキュシオどのを殺害しましたるを

ロミオと申す若人が討取つてござります。

キャピユレット なに、チツバルト！ お、妾の甥の弟の子の！ お、御領主！ お、甥

よ！ わが夫！ お、大事の〜親族の血汐が流されてぢや！ 公平な

御領主さま、モンタギューの血を流いて吾等のを償うて下さりませい。お、

甥よ〜！

領主 ペンダリオよ、此無慚な闘争を始めたは誰れぢや？

ベンデ チツバルトにござります、ロミオに殺されました。ロミオは言葉穩かに、

此争端の取に足らぬ由を反省させ、二つには殿の御怒を思ひやれいと聲色
 を和らげ、膝を曲げて、さまざまに申しましたなれども、中裁には耳を假し
 ませぬチツバルト、理不盡なる怒の切先、只一突にとマアキュシオ殿の胸元
 をめがけて突いてかゝりまする、此方も同じく血氣の勇士、なにを小才覺な
 と立向ひ、氷の死の手をば引外して右手に附入りまする手練の切先、それを
 撥反すチツバルト。ロミオは其時聲高く「お待ちやれ、兩氏！ 退いたく！」
 といふより速く劍を抜いて、其怖ろしい切先をば叩伏せく、二人が間に
 割つて入る、腕の下よりチツバルトが突出しましたる毒刃に、マアキュシオど
 のは敢無最期。さてチツバルトは其儘一旦逃去りましたが、やがて又取
 つて返すを、今や復讐の念に満ちたるロミオが見るよりも、電光の如く切つ
 てかゝり、引分けまする間さへもござらぬうちに、チツバルトは突殺され、倒
 る、途端に身を翻し、ロミオは逃去つてござりまする。此儀相違あらばべ

ンゾリオが命を召されませう。

キマ妻

此仁はモンタギューの親戚ゆゑ、最負心がさもない事をも申させます。此
 不正な争闘には二十人餘も關係うて只一人を殺いたに相違ござりませぬ。
 殿さまに願ひまする、是非ともお成敗の下さりませい。ロミオはチツバル
 トを殺いたからは、生いてはおかれませぬ。

領主

ロミオはチツバルトを、チツバルトはマアキュシオを殺いたとすれば、マアキュ
 シオの血を償ふべき者は誰れぢやや？

モンタ

それはロミオではござりませぬ、彼れはマアキュシオどの、親友でござる。

領主

忤が曲事は國法の絶つべき筈のチツバルトの命を絶つたまで、ござります。
 其曲事ゆゑに、即刻追放を申附くる。汝等の偏執に予等までも卷込まれ、
 其粗暴の鬭争によつて我血族の血汐を流いた。我此不幸を汝等にも悔ま
 す爲、さびしき科料を課さうするわ。陳辯も分疏も聽かぬ。涙も祈禱も罪

をば購はぬぞよ。それゆゑに何も申すな。急ぎロミオを退去らせい。
 さもなうて見附けられなば、其時が即て最期ぢや。此死骸を荷ひゆきて予
 が命を待て。人殺しを憫むは人を殺すにひとし。

第二場 同處。 キャピュレットの庭園

ジュリエット 出で来る。

ジュリ

駈けよ速う、火の脚の若駒よ、日の神の宿ります今宵の宿へ。フィートンの
 やうな御者があたらなら、西へくと鞭をあて、すぐにも夜を將れて來うも
 の、曇つた夜を。 隙間もなう黒い帳を引渡せ、戀を助くる夜の闇、其間に驅

落者の目も閉がれて、ロミオが見られもせず、噂もされず、予の此腕へ飛込
 んで來やるやうに。 戀人は其麗しい身の光明で、戀路の闇をも照らすとい
 ふ、若し又戀が盲ならば、夜こそ戀には一段と似合ふ筈。 さあ來い、夜よ、黒
 いづくしの服を被た、見るから真面目な、嚴格しい老女どの、速う來て教へて
 たも、大切な無垢な操を二つまでも賭けた勝負ぢやが、予や何卒して負けて
 のけたい。 汝の黒い外套で頬に羽ばたく初心な血を捉迷藏のやうに包ん
 でたも、すれば臆病な此心も、見ぬゆゑに強うなつて、何するも戀の自然と思
 はうすに。 夜よ、來や、速う來や、ロミオ。 あゝ、夜の晝とはお前の事ぢや。
 夜の翼に降りたお前は、鴉の背に今降りかゝる其雪の白う見ゆるよりも白
 からうす。 速う來や、やさしい懐しい夜の闇、さ予のロミオを賜も。 やが
 てロミオがお死にやつたら、死骸は汝に遣らう程に、細截いて星にせい、し
 たら大空が見かはすやうに美しうならうゆる、世界中の者が夜に惚れ、あの

爛々した太陽をば最早誰れも拜むまいぢやまで。戀の屋敷は買うたれども、自身の住居にはまだならぬ、身は人に賣つたれども、まだ賞翫はしてたもらぬ。え、待つ間がもどかしい、祭日の前の晩に、製へて貰うた晴衣はあつても、被ることが成らぬので氣をいらつ子供のやうに。……お、あれ乳母が、一定消息ぢや。ロミオの名をでも告ぐる舌は天人の聲と聞ゆる。……これ、乳母、何の消息ぢや？ 持つてゐやるは何ぢや？ ロミオが取つて來いと被言つた繩かや？

乳母

あい、く、繩ぢや。

繩を抛出す。

ジュリ

あゝまあ！ 何事が起つたのぢや？ 何で其方は手を絞るのぢや？

乳母

あゝ、かなしや！ 死なしやつた〜！ もう無効でござります。もう無効でござります。あゝ、かなしや！……逝なしやつた、殺されさつし

やつた、死なしやつた！

ジュリ

それほどに天が無慈悲か！

乳母

天は如何あらうとロミオは無慈悲ぢや。お、ロミオどのが、ロミオどのが！……誰れが思ひがけうぞ？ ロミオどのが！

ジュリ

何で予に氣を揉すのぢや？ 其様な怖しい唸り聲は地獄でなうては聞かれぬ筈ぢや。ロミオが自害でもお爲やつたか？ これ唯と言つて見や、その

唯といふ一言が、只一目で人を殺す毒龍の目にもまして、怖しい憂目を見する。其様な羽目とならば予の身は最早駄目ぢや。これ、お死にやつたが實ならば誰と言や、さうでなくば否と言や。 なんだ一言二言で此身の生死が決るのぢや。

乳母

其剣を見ましたが、此眼で見ましたが……南無さんぼう！……ちやうど此お立派な胸元に。いた〜しい、無慚な、いた〜しい死顔。 蒼白う、灰の

やうに蒼白うなつて、血みどろになつて、どこもく血が凝りついて。見ると其儘、予や氣を失なうてしまひましたわいの。

ジュリ

お、裂けよ、此胸よ！ 破産した不幸な心よ、一思ひに裂けてしまうてくれい！

目も此上は牢へ入れ、もう自由を見るな！ 穢しい塵芥め、元の土塊へ歸りをれ、生きて働くには及ばぬわい、ロミオと一しよに同じ柩車の積荷となりをれ！

乳母

お、チップバルトどの、チップバルトどの、此上もない頼もしいお方であつたに！ お、お懇なチップバルトどの！ お立派なお方！ お前が亡くならつしやるのを生きてゐて見ようとは！

ジュリ

や、こりや、風向が變つたわ、如何した暴風雨ぢや？ ロミオが殺されて、そしてチップバルトもお死にやつたか？ 大事な従弟も、尙大事なロミオどののも？ もしさうならば、大審判日の喇叭手よ、世は最早絶滅ぢやと宣告せ

乳母

い！ あの二人が逝にやつたなら、生きてゐる甲斐はない！
チップバルトどのはお死にやつて、ロミオどのは追放ぢや。下手人のロミオどのは追放にならしやつたのぢや。

ジュリ

お、く！…あのロミオの手でチップバルトを？

乳母

さよぢや。あ、く、さよぢやわいの！

ジュリ

お、花の顔に潜む蝮の心！ あんな奇麗な洞穴にも毒龍は棲ふものか？

面は天使、心は夜叉！ 美しい虐君ぢや！ 鳩の翼被た鴉ぢや！ 狼根性の羊兒ぢや！

見た目は神々しうて心は卑しい！ 外面とは裏表！ いや

しい聖僧、氣高い悪黨！ お、造化主よ、あのやうな可憐らしい人間の

肉體にすら夜叉の魂を宿らいたなら、地獄の夜叉の肉體には何者を住ませ

うとや？ あんな内容にあのやうな表紙を附けた書があらうか？ あんな

華麗な宮殿に虚偽譎詐が棲はうとは！

にやつた上に、殿りに「ロミオは追放」。追放と聞くからは、父母もチッパルトもロミオもジュリエットも皆々殺されてしまつたのぢや。「ロミオは追放！」其一言が人を殺す力には際も量も限も界も無いわいの。言葉では言ひ盡されぬ不幸ぢや。これ、父上や母上は何處にぢや。

乳母 チッパルトどの、死骸に取着いてお泣きやつてでござります。彼方へ往かしやるなら案内のしませう。

ジュリ 涙で創口を洗はしやるがよい、其涙の乾る頃にはロミオの追放を悔む予の涙も大概盡う。其繩を拾うてたも……ても惘然な繩よの、汝等は欺されたなう、汝等も予もぢや、ロミオが追放になりやつたによつて。ロミオは汝等をば寢室への通路にせうとお思やつたに、予は志望を能い遂げいで、處女のまゝで世を去るのぢや。さ、繩よ。さ、乳母よ。これから婚禮の床へ往かう。ロミオではない死神よ、汝に此身を任さうわいの！

乳母

速う居間へゆかしやれ。お前を喜ばす眞實のロミオを捜いて來う。其居處は知つてをる。これの、こちのロミオどのは、今宵こゝへ來やしやる筈ぢや。妾が往て呼んで來う。はて、ローレンスさまの庵室にロミオは隠れてござらしやります。

ジュリ

おゝ、速う逢うて！そして此指輪を予の勳爵士どのに手渡して、訣別に來やしやれと傳へてたも。

二人ともに入る。

第三場 同處。ローレンス法師の庵室。

ローレンス法師出で來る。

ローレ ロミオよ、出ておじやれ、出ておじやれよ、こりや、人目を恐れ憚る男。あゝ、卿は憂苦勞に見込まれて、不幸と縁組をお爲やつたのぢやわ。

ロミオ 出て来る。

ロミオ 師の御坊か、消息は何とぢや？ 殿の宣告は何とあつたぞ？ まだ知らぬ

何様な不幸が、予と知合にならうといふのぢや？

ローレ されば、其可厭友達衆に 和子は親しみが多過ぎるわい。お宣告を知らせ

に来た。

ロミオ 一定命を召されうでな？

ローレ いや、寛大なお宣告、一命は召されいで、追放にせいとの命令ぢや。

ロミオ なに、追放！ 慈悲ぢや、死罪ぢやと言うて下され。誦竄の身となるは死

ぬるよりも怖しい。追放と言うて下さるな。

ローレ いや、エローナからは追放ぢやが、世界は廣い、まゝ落着いてござれ。

ロミオ エローナの市を離れては世界は無い、有るものは只煉獄ぢや、苛責ぢや、地

獄ぢや。此處から逐はるゝは世界から逐はるゝも同じ事、世界から逐はる

ゝは殺さるゝも同じ事、すれば追放とは死罪の隠し名ぢや。死罪の事を追

放といはしやるは、黄金の斧鉞で予の首を刎ねておいて、汝は幸福ぢやと笑

うてござるやうなものぢや。

ローレ おゝ、罪深や〜！ おゝ、作法知らず、恩知らず！ これ、卿の罪科は國法

では死罪とある、然るに慈悲深い御領主が卿の肩を持ち、御法を曲げ、怖し

い死罪の名を追放とは變へさせられた。其難有いお慈悲が分らぬか？

ロミオ 慈悲ではなうてそりや苛責ぢや。ジュリエットがゐる此處は天國、こゝに

住む限りは猫も犬も騾鼠も、どのやうな屑々物も、姫の顔が見らるゝゆる天

國にゐるのぢやが、ロミオにはそれが能はぬ。腐肉に集る蒼蠅でもロミオ

には優す幸福者ぢや、風雅びた分際ぢや。彼奴等は可憐しいジュリエットの

手の白玉を掴むことも出来る、まつた姫の唇から……其上下の唇が、淨い温淑な處女氣で、互ひに密接し合ふのをさへ悪いことと思つてか、いつも眞赤になつてゐる……其姫の唇から永劫死なぬ天福を窃と盗むことも出来る、ロミオにはそれが能はぬ。ロミオは追放の身の上ぢや。蒼蠅でも能うすることをロミオばかりは能うせぬ、彼奴等は自由の身、吾等は追放！ これでも足下は追放を死罪でないとおしやるかいの？ 調合した毒はないか、研ぎすまいた刃はないか、如何に卑しうても大事ない、一思ひに死ぬ法は無いか？……「追放」……「追放」で殺さるゝのは予や否ぢや！ おゝ、御坊よ、追放とは墮獄の輩が用ふる語、唸り聲が附物。そのやうな語を聞かせて予を切りさいなむとは酷いわい、つれないわい、それでも高僧か、司悔僧か、教導師か、莫逆と誓うた信友か？

ローレ はてさて、愚な狂人どの、ま、予の言ふことを聽かつしやれ。

ロミオ きつとまた追放といふことを被言るであらう。

ローレ いや、其語の鋭鋒を防ぐ甲冑を與さう。逆境の甘い乳ぢやと謂ふ哲學こそは人の心の慰め草ぢや、よしや追放の身とならうと。

ロミオ それまた「追放」と！ えゝ、哲學め腐りをれ！ 哲學でジュリエットが出来、市が移され、領主の宣告が取消さるれば知らぬこと、哲學が何の役に立つ、何にならう？ もう聽かぬ。

ローレ おゝ、すれば狂人には耳が無いと見える。

ロミオ 無い筈ぢや、賢い人にさへ目が無い世ぢや。

ローレ いや、卿の今の身の上について、談じたい事があるのぢや。

ロミオ 身に感じておゐやらぬ事を、何で談ずることが出来る。貴僧が子程に齡が若うて、あのジュリエットが戀人で、婚禮の式を擧げて只一時も經たぬうちにチツバルトをば殺いて、予のやうに戀ひ焦れ、予のやうにあさましよう追放さ

れた上でなら、予に談ずることも出来うすれ、このやうに頭髪を搔きつて、
ま此様に地上に倒れて、まだ掘らぬ墓穴の
尺を取ることも出来うすれ！

ロミオ 頭髪を搔きしり 仰向けに倒れ
て歎く。此時奥にて戸を叩く
音。

ローレ 起ちやれ。案内がある。ロミオや、速う身
を匿しやれ。

ロミオ 予や匿れぬ。胸の惱悶の唸きの息が霧の
やうに立籠めて追手の目を塞いだら知らぬ
こと。

戸を叩く音。



ローレ

あれ、あの叩くことは！……誰れぢやな！……速う起ちや、捕へられうぞ
よ。……暫く……！……立ちやく。

叩く音。

予の書齋へ……只今々々！……はてさて、愚かにも程があるわ！……はい
く、只今参ります！

叩く音。

けたまはしうお叩きやるは何人ぢや？ どこから見えたぞ？ 何の御用ぢ
や？

乳母

(内にて) 川は入つてから申します、ジュリエットさまからでござります。

ローレ

なれば、ようこそ。

戸を開くる、乳母入来る。

乳母

お、御坊さま、御坊さま、姫さまの殿御は何處にござらします、ロミオ

さまは何處に?

ローレ それ、そこに地上に、おのが涙に酔うて。

乳母 おゝ、こちの姫さまも、ま、ちやうど其通りぢやがな!

ローレ ても、いたましい悲哀の同情! 笑止千萬な境遇!

乳母 こちのも其通りに平伏つて、泣面かいて、哭立て、ちや。立たしやれ。

男なら立たしやりませ。姫の爲ぢや、ジュリエットどの、爲ぢや、起きさし

やれ、立たしませ。(此時ロミオ唸く。) 何で其様に歎かしやるのぢや、何で其

様に大業に?

ロミオ (俄に起ち上りて) おゝ、乳母!

乳母 あゝ、もし! これさ、もし! はて、死ぬれば何もかも結局ぢやがな。

ロミオ 今ジュリエットと被言つたの? 姫は何としてぢや? 姫は子を二人が中の

歡樂の其水子を姫の身内の血で汚いた怖しい殺人者と思つてはゐやらぬ

か? 何處にぢや? 何としてぢや? 隠れた吾女房は破れた互ひの誓文

を何と言つてぢや?

乳母 おゝ、何も言はしやらいで、泣いてはつかり。寢床の上に倒れさつしやる

かと思ふと、即て又飛び起きてチップルトと呼ばらつしやる、かと思ふとロ

ミオと呼ばつて、又横例しにならつしやります。

ロミオ すりや其名前に胸板を射抜かれたやうに思つて、其名前の持主が大事の近

親を殺いたゆる。おゝ、御坊、をしへて下され、此肉體の何のあたりに、予

の醜穢しい名は宿つてゐるぞ? さ、をしへて下され、其憎い居所を切裂い

てくれう。

劍を抜く。

ローレ まゝ、おのちなことをすまい。これ、男ではないか? 姿を見れば男ぢや

が、其涙は宛然の女ぢや。狂氣めいた其振舞は理性のない獸類同然。男

らしうも女らしうも見えて、獸類らしうも見ゆる見ともない振舞！ はてさて呆れ果てた。誓文、予は今少し立派な氣質ぢやと思つてゐたに。チツパルトを殺いた上に、おのが身をも殺さうとや？ 自ら墮地獄の罪を犯いて、卿ゆるにこそ生きてゐやる、あの姫をも殺さうとや？ 何で卿は出生を呪ひ、天を、地を呪ふのぢや？ 生と天と地と此三つが相合うて出来た身をば、つい無分別に棄てうでな？ 馬鹿な、馬鹿な！ 姿を、戀を、分別を辱ふる振舞といふものぢや。譬へば吝嗇者のやうに貨は夥しう有つてをしても、正しう用ふることを知らぬ、姿をも、戀をも、分別をも、其身の盛飾となるやうには。卿の其氣高い姿は徒の蠟細工同様、男の勇氣からは外れたものぢや。卿の戀の盟約は内容の無い空誓文、なりやこそ養育まうと誓うた戀をも殺いてのけうと爲やるのぢや、卿の分別は姿や戀の飾ぢやが、本體が善うないので不具となり、愚な卒が藥筐の火藥のやうに、扱ひかたがわ

るので爆發し、我れと我が武器で身を滅す。こりや、しつかりとお爲やらう！ つい最前まで戀しさに死ぬる苦しみを爲ておじやつた其戀人のジュリエットは羨ない。すればそれが先づ幸福。まつたチツパルトは卿を殺いたでもあらうずに、卿がチツパルトを殺いた。それもまた一つの幸福。次に死罪ともあるべき國法は卿の身方となつて追放で事済み。それもまた一つの幸福。天の恩恵は重ねて脊に下り、幸福が餘所行装で言寄りを。それに何ぢや、意地くねの曲つた少女のやうに、口先を尖らせて運命を呪ひ、戀を呪ふ。氣を附けや、氣を附けや、さういふ輩があさましい最期を遂ぐる。さ、豫定通り戀人の許へ往て、居間へ攀ち登り、速う慰めてやりめされ。したが夜番の置かれぬうちに別れませうぞ、マンチュアへ往かれぬやうになつてはならぬ。マンチュアに塾してゐやる間に、わしが機を見て二人が内祝言の顛末を公にし、兩家の確執を調停し、御領主の赦を乞ひ、

やがて卿を呼返すことにせう。其折の喜悅は出て行く今の悲痛の千萬倍であらうぞよ。……乳母、先へ往きや。姫によう傳へてたもれ、家内中を早う就褥しめさと被言れ、歎きに疲れたれば眠むるは定ぢや。ロミオは今直參らるゝ。

乳母 はれま、結構なお教訓ぢや、夜すがら此處に居残つても聽聞がしたいわいの。てもま學問は偉いものぢやな！ 殿さん、貴下が來さしますことを姫さまに申しましょ。

ロミオ さういうて戀人に、叱る準備をさせてたもれ。

乳母 もしえ、この指輪は姫さまから、妾に貴下へ上げませいと云うて。さ、速う、急がしやれ、甚う夜が深けたによつて。

乳母 入る。

ロミオ おゝ、これで心が安らいだわ！

ローレ さ、速う往きや。さらばぢや。貴下の幸運は只此一つに繋る、夜番の置かれぬうちに立出するか、さなくば夜明くる頃姿を窺いて此市を遠ざかるか、二つに一つぢや。マンチュアに蟄してござれ、忠實な僕を求め、時折其男して此方の吉左右を知らせう。さ、手を。もう晚い。さらばぢや、機嫌よう。此上も無い歡樂が予を呼ぶのでなかつたら、斯う早急に別るゝは悲しいことであらうす。恙なうござりませ。

二人左右に別れて入る。

第四場 同處。 キャピユレット家の一室。

キャピユレット 長者同じく夫人及びパリス 出來る。

キヤ長 かやうな珍變ちんべんが起つたによつて、女むすめに説聞せきわんす暇いとまもござらなんだ。女むすめもチツバルトをば甚きつう懐なつかしう思おもうてをつたに、まつた吾等われらとても同様どうやうぢやに。さりながら人は皆死みなしぬるやうに生うまれたもの。もう今宵こよひは晩おそうござる、女むすめは降りては參まゐるまいぢやまで。貴下あなたがござつたればこそ、さもなれば吾等われらとても、一時ときも前に、臥床ふしんだでござらう。

パリス かういふ愁傷なげきの最中さなかには祝言しうげんの話はなしも出來できまい。お内うちかた、おさらばでござる。娘御むすめによろしう傳つたへて下くだされ。

夫人 心得こころえました。女むすめの心こころは明日あす早はやう質たいしましよ。今宵こよひは悲歎なげきに囚とらはれて閉籠とらこめてのみ居ゐまする。

パリス 行きかくる。

キヤ長 いやなう、パリスどの、女むすめは敢あへて献けんじまする。彼かれめは何事なにことたりとも吾等われらの意志こころざしには背そむくまいでござる、いや其儀そのぎは聊いさも疑かうたひ申まうさぬ。……妻これよ、其許あなたは

パリス 寝ねる前に女むすめに逢あうて、婿むこがねパリスどの、深ふかい心入こころいれの程ほどを知らいて、よいかの、次つぎの水曜日すいようびには……いや、待まちちやれ、けふは何曜日なにようびぢや？

キヤ長 月曜日げつようび！ は、あ！ かうつと、水曜日すいようびはちと急きふぢや。木曜日もくようびにせう。……女むすめに木曜日もくようびには此殿このとのと祝言しうげんさすると被言おしやれ。ようござるか？ 此早急このさつきふに

異議いぎはおざらぬか？ 業々げふくしうはすまい、ほんの近ちかしい輩やから一兩名りやうめい、はて何故なぜと被言おしやれ、近親きんしんチツバルトが殺ころされて間まがないことゆゑ、盛宴せいえんの催もよぶすときは無情むじやうな行爲しごなとも思おもはれうによつて。されば近ちかしい友達ともだちをば只ただ五い六ろく名めい限り招まねくことにしませうす。……したが貴下あなた、木曜日もくようびでようござるか？

パリス 吾等われらは其木曜日そのもくようびが明日あすであつてほしうござる。

キヤ長 さらば先まづお歸かへりあれ。なれば木曜日もくようびと定きめまする。……卿あなたは寝ねる前まへに女むすめに逢あうて、當日たうじつの準備こころまうけをさせたがよい。……おさらばでござる。……予あなたが居間ゐま

へ燭火あかしを持って！ はれやれ、晩おそうくなつたわ、こりや聽きてお早はやうと言いはねばなるまい。……さ、お休やすみなされ。

パリスと夫婦ふうふと左右さゆうに分わかれて入はいる。

第五場 同處。 キャピュレットの庭園。

ロミオとジュリエットと樓上ろうじやう窓口まどぐちに現あらる。

ジュリ 逝いなうとや？ 夜よはまだ明あきやせぬのに。 怖こはつてござるお前まへの耳みみに聞きえたは雲雀ひばりではなうてナイチンゲールであつたもの。 夜毎よごとに彼處あそこの柘榴じやくろへ來きてあのやうに囀さへりをる。 なあ、今いまのは一定きつとナイチンゲールであらうぞ。
ロミオ いや、且まさを知らしする雲雀ひばりちや、ナイチンゲールの聲こゑではない。 戀人こひびとよ、

ジュリ あれ、お見みやれ、意地いぢの悪わるい横縞よこしまめが東ひがしの空そらの雲くもの裂目さけめにあのやうな縁附へりつけをる。 夜よの燭火ともしびは燃え盡つきて、嬉うれしげな旦あしためが霧立きりたつ山の巔やまいたびきに足あしを爪立つまだてゝ立たつてゐる。 速はやう往いねば命助いのちたすかり、停とどまれば死しなねばならぬ。

ジュリ あの光明ひかりは朝あさぢやない、いえ、朝日あさひではないわいの。 ありや太陽たいやうがお前まへの爲ために、今宵こよひマンチュアへの道案内みちしるべに炬火持たいまつもちの役やくさしよとて、急きふに呼出よびだいた光り物ひかりものちや。 ちやによつて大事だいじない、まだ逝いなしやるには及およばぬわいの。 捕とらはれうと、死罪しざいにならうと恨うらみはない、卿せめじが望のぞみとあれば。 あの灰色はひいろは朝あさの眼めで無いとも言いはう、ありや婦娥ふんしやの額ひたひから照返てりかやす白光びやくくわうちや。 まつた吾等われらの頭かしらの上うへで大空おほぞら高たかう鳴響なりびやくあの奏樂しやうがくも、雲雀ひばりの聲こゑでは無いと言いはう。 逝いなにた

ロミオ いよりも此處こゝに居かたいが幾層倍いくそうばいちや。 さ、死しよ來きたれ、喜よろこび迎むかへう！ ジュリ エットが所望しよまうしてぢや。 戀人こひびとよ、どうぞいの？ さ、話はなさう。 朝あさではない。 ジュリ いや、朝あさぢや、朝あさぢや。 速はやう逝いなしやれ、速はやうゝ！ 聞辛きづらい蹴立けたたましい高たか

調子で、調子外れに啼立つるは、ありや雲雀ぢや。雲雀の聲は懐しいとは
虚偽、なつかしい人を引分けをる。慕と目を交換へたとは事實か、ならば
何故聲までも交換へなんだぞ？ あの聲があればこそ抱きあうた腕と腕を
引離し、朝彦覺す歌聲で、可愛いち前を追立てをる。 おゝ、速う逝しませ、
だんぐ、明るうなつて来る。

ロミオ 明るうなればなる程、暗うなる二人が身の上。

乳母 出で来る。

乳母 姫さま！

ジュリ 乳母か？

乳母 御方様が只今お居間へ入らせられます。夜は明けた、もし、油断なう心を配つて。

ジュリ なりや、窓よ、日光を内へ、命を外へ。

ロミオ おさらば、さらば！ これを名残にへと接吻して降りて去う。

樓を下りかゝる。

ジュリ (樓上より) お前もう逝しますか？ あゝ、戀人よ、殿御よ、わが夫よ、戀人よ！
きつと毎日消息して下され。これ、一時も百日なれば、一分も百日ぢや。
おゝ、そのやうに勘定したら、また逢ふまでに予や何様に齡を取らう！

ロミオ さらばぢや！ かりそ

めにも機會さへあれば
消息を怠ることではな
い。

ジュリ おゝ、また逢はれうか

いの？

ロミオ 念には及ばぬ。今の



此憂苦勞は、楽しい將來の昔語りや。

ジュリ お、如何せうぞ！ 心めが忘しい取越苦勞をさせをる。下にわしやるのを此處から見ると、どうやら墓の底の死人のやうぢや。目の故か知らねどもお前の顔が蒼う見ゆる。

ロミオ 眞實、子の目にも、卿の顔が然う見ゆる。憂悲愁が互ひの血汐を涸らいたのぢや。おさらば、さらば！

ロミオ 入る。

ジュリ お、運命神よ、運命神よ！ 皆が汝を浮氣者ぢやといふ。なんぼ汝が浮氣であらうと、世に聞えた堅實な人を何とすることも出来まい。いや、やつぱり浮氣がよい、くしたら彼の人を直壓いて予へ返いてたもらうによつて。

夫人 (内にて) 女や〜！ 起きてかいの？

ジュリ 誰れぢや呼ぶは？ 母さまか知らぬ。晩うまで眠らいでか、早うから目を

覺いてか？ 何事があつて見えたやら？

キャピュレット 夫人出で来る。

夫人 ま、其方、如何ぞしやつたか？

ジュリ 心地がわるうござります。

夫人 いつまでも從兄どの、ことを悔んでゐるか？ これの、涙で洗うたら墓から出て來やると思つてか？ 出て來やつたとても生かすことは出来まい。ぢやによつて思ひ切りや。歎くは愛情の深い證ぢやが、餘りに深く歎くは分別の足はぬ證ぢや。

ジュリ でも此様な不幸は存分に泣いてのけたい。

夫人 存分にお泣きやらうと、不幸な人が歸りはせぬ。

ジュリ 返らぬこと、思つても、存分に泣かいではをられぬ。

夫人 すれば其方は、殺いた當の悪黨が尙存へてゐくさるのを、然程にはお泣きやらぬなり？

ジュリ え、悪黨とはえり？

夫人 あのロミオの悪黨。

ジュリ (傍を向きて) 悪黨と彼の人では大きな相違ぢや！……刑よ、赦させられませ！ 妾は眞實赦しました。 言うても、思ひ出すと悲しうてなりませぬ。

夫人 それと言ふのも、あの二心の下手人めが生存へてをるからぢや。

ジュリ あい、さうぢや、妾の此手が能う達かぬ遠い處に。 妾の手一つで従兄どの、敵が討ちたい！

夫人 敵は一定取つてやります、懸念には及ばぬ。 すれば最早泣きやんな。 あの追放人の無頼漢が住んでゐるマンチュアへ使を送り、さる男に言ひ含めて

尋常ならぬ飲料を彼奴めに飲ませませう、すれば即てチップバルトが冥途の同伴。 さうなれば其方の心も慰まう。

ジュリ ほんにロミオの顔を……死顔を……見るまでは、妾や如何しても心が勇まぬ、従兄がお死にやつたのが、それ程に心に沁みて悲しい。 母さま、其毒を持つて行く使の男とやらが定つたら、薬は妾が調合せう、ロミオがそれを手に入れたら、直にも安眠しをるやうに。 お、彼奴の名を聞くと身が顫る、もどかしいなあ、チップバルトを殺しをつた彼奴の肉體をば搔きつて、懐しいく、従兄への此眞情を見することも出来ぬか！

夫人 方法は自身で工夫しやれ、使者は妾が捜しませう。 それはさうと、めでたい報道を持つて来たぞや。

ジュリ めでたい事とは耳寄りな、此様な辛い時に。 それは何様な事でござりませす？

夫人 はて、其方は仁情深い父御をお有ちやつてぢや。其方は愁歎を忘れさせうとて、俄にめでたい日をお定めやつた、予も其方も曾ぞ思ひがけぬめでたい日を。

ジュリ はれま、母様、それはまた何様な？

夫人 はて、女よ、次の木曜日朝早う、あの風流な、立派な若殿のバリスどのがセント・ピーターアの會堂でめでたう其方を花嫁御にお爲やる筈ぢや。

ジュリ そのセント・ピーターアの會堂かけて、いゝやピーターアどのをも誓語にかけて何のそれがめでたからう！ 嫁入はせぬわいの。何といふ早急ぢや。申入も聞かぬうちに婚禮とは何事ぢや？ 父上さまに言うて下され、妾は嫁入はまだしませぬ。嫁入すれば如何あつてもロミオへ往く、憎いと思ふあのロミオへ、バリスどのへ往くよりは。まあ、ほんに思ひがけない！

夫人 あれ、父御がわせた。自身で然う言うて、父御がそれを其方から聞いて何

と思はしやるかを見たがよい。

キヤビユレット長者先に乳母従いて出て来る。

キヤ長 日が沈むと露が降りるは尋常ぢやが、甥の日没には如瀧雨ぢや。どうぢや！ 噴水像どの！ え、まだ泣いておじやるか？ え、いつまでも雨天ついきか？ 其許は只一つの小さい身體で、船にもなれば、海にも風にもなりやる。先づ目は海ぢや、始終涙の満干がある、身體は船、其鹽辛い浪を走る、溜息は風ぢや、涙の浪と共に荒廻り、涙はまたそれを得て倍々荒るゝ、はて、和が急に來なんだら、命の船が顛覆つてしまふわい。……何とぢや、卿！ 吩咐けた通りをお語りやつたか？

夫人 はい、申しましたなれど、望みませぬ、有難いと言うてをります。阿呆めは墓の中へ嫁入するがようござります！

キヤ長 ま、待たしませ！ 如何したと言はします、いやさ、どうしたと被言るのぢ